



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第63回学術集会ならびに第26回春季研修会が、新型コロナウイルス感染拡大防止の政府の方針を受け、延期・Web開催となりましたが、日手会ニュース本号におきましては、この決定以前より発刊に向け準備をしておりましたため、本文はそのまま掲載させていただきます。ご理解頂きますようお願い申し上げます。 広報渉外委員会

第63回日本手外科学会 学術集会開催にあたって

坪川直人

(一般財団法人新潟手の外科研究所
新潟手の外科研究所病院)

目次

- 第63回日本手外科学会学術集会開催にあたって
- 手外科温故知新VII:
- 手外科バトンリレー(第6回)
- Joyの声(第3回)
- 物故会員への追悼文(阿部宗昭先生)
- 委員会報告
- 第4回 日・伊手外科会議に出席して
- 招待国として参加した第55回フランス手外科学会を振り返って
- JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記
- KSSH-JSSH Travelling Fellow報告記
- 日本手外科学会関連のお知らせ
- 関連学会・研修会のお知らせ
- 編集後記

この度、第63回日本手外科学会学術集会を令和2年4月23日(木曜日)・24日(金曜日)に朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンターで開催させていただきます。大変光栄に存じます。792題といった多数の一般演題申し込みを頂き、会員の皆様方に御礼申し上げます。プログラム委員の先生方による厳正な審査により、口演378題・ポスター294題を採択と致しました。採択率は85%でした。一人でも多くの方に発表の機会をと思っておりましたが、会場の都合により不採択になりました先生方にお詫びいたします。採択結果はホームページ上に掲載しております。詳しい日程につきましては発表者へ個別にメールでご連絡致しました通りです。事前参加登録はオンラインにて受け付けます。今回のテーマは‘Lesen, denken, und arbeiten’と致しました。これは恩師田島達也先生が卒業生に送ったドイツ語の一文です。医師は勉学に励み国内外から様々な知識を吸収し、熟慮し

自分のものとし、学業及び診療の糧とせよとの教えです。

今回は特別講演として、前琉球大学整形外科教授金谷文則先生にご講演をお願いしました。また、両手を失いながら詩人、画家としてご活躍の阿蘇風の丘美術館館長大野勝彦先生をお迎えし、市民公開講座としてご講演いただきます。残念ながら手外科の社会への認知度は高くありません。広く市民の皆様到手外科とはなにかを知っていただきたいと思っております。招聘した7名の外国人講師の先生方には、海外での最新の手外科の現状の講演をお願いしました。国内講師の先生方からは教育研修講演で舟状骨のバイオメカニクス、リウマチ、腱移行術、神経電気診断学、屈筋腱、手指の再建についてご講演いただきます。リウマチの手外科治療・リハビリ・手外科と労災・手指の再建のシンポジウム、屈筋腱治療の国際シンポジウム、橈骨遠位端骨折プレート治療のスポンサーシンポジウムも予定しております。パネルディスカッションとしては舟状骨偽関節、母指CM関節変形症、胸郭出口症候群についての討論を予定しました。また、プログラム委員の審査で高評価を得た臨床口演6題、基礎口演6題、ポスター6題を優秀演題として2日目の午後から発表していただきます。各々1題ずつ計3題を最優秀演題として、閉会式で発表し表彰いたします。該当者は閉会式までお残りください。会期中、新潟ならではのおもてなしも考えておりますので、一人でも多くの先生方の御参加をお待ちしております。新潟でお会いすることを楽しみにしております。

なお、国内の先生方の発表の機会を確保するために第63回学術集会は極力開催する予定ですが、コロナウイルスの流行のため、海外よりの招聘講師の講演キャンセルが予想されます。今後、講演プログラムの変更が生じることがございますので、学術集会ホームページで随時情報をご確認いただけますようお願いいたします。

手外科温故知新Ⅶ： 手外科学会・ハンドセラピィ学会連携の重要性

上 羽 康 夫

日手会名誉会員、医療法人白菊会理事長

20世紀に始まった手外科は21世紀に入っても堅実に進歩を続け、それに伴ってハンドセラピィ(以後はHTと略す)も著しく進歩している。両者の発達時期や場所は必ずしも同一ではないが、両者が次第に融合した過程は学会の歴史や経過を振り返ると理解し易い。手外科を最初に始めたアメリカ合衆国では第二次世界大戦直後の1946年にDr. Sterling Bunnellなど軍人外科医が中心となりアメリカ手外科学会(ASSH)を設立したが、アメリカ・ハンドセラピィ学会(ASHT)は1975年にBonnie Olivett H.T.ら6人のハンドセラピストが手外科医の示唆を得て、学会を設立した。我国では1957年に天児民和教授(九大)らの整形外科教授が中心となって日本手の外科学会(JSSH)を設立された。他方、日本HT研究会は1980年には設立されていたが、学会ではなかったので日手会の重鎮である津山直一教授(東大)、田島達也教授(新潟大)らの示唆により奥村チカ子ら8人の理学療法士・作業療法士が中心となって学会創設を準備し、1989年(平成元年)に第1回日本ハンドセラピィ学会(JSHT)が北九州で開催された^{文献1)}。だが、当時は未だ日手会と日本HT学会は別々の会場で開催されていた。両学会が同時期・同会場で初めて開催されたのは、1992年第35回日手会と第4回日本HT学会が京都国際会館で開催されたのが最初であった。当時は、米国フィラデルフィア市トーマス・ジェファソン大学整形外科の2人の教授:James M. Hunter M.D. & Laurence H. Schneider M.D.と2人のハンドセラピスト:Evelyn J. Mackin P.T. & Anne D. Callahan O.T.が分担編纂して、1978年“Rehabilitation of the Hand 1st ed.”Mosby Co.を出版し、1984年には第2版も出版されて世界各国でハンドセラピィへの関心が大いに高まった時代であった。

米国ニューヨーク・コロンビア大学Prof. Robert E. Carrollのもとで手外科を学んだ筆者は1965年に帰国し、直ちに京大病院で勤務を始めた。Dr. Hunterや Dr. Schneiderは共にProf. Carrollの教え子であったので同門であり、兄弟弟子であり、一緒に症例検討会に参加したり、仕事をする機会もあったので、帰国後もHTには関心を持っていた。1970年より日本ハンドセラピィ研究会・学会の初代顧問であった田島達也教授の後を継いで、1998年から著者がJSHT顧問を仰せ付かった。当時から日手会と日本HT学会との連携を深める必要性を強く感じていた。2007年からは阿部宗昭先生がJSHT顧問となられ、日手会とJSHT学会との調整を諮りながら両学会の進歩・発展に尽力された(写真1)。

昨年は令和時代の幕開けであり、その年に「手の日:8月10日」が誕生した。日本手外科学会にとって2019年は格別の年であった。我国の手外科・HTは現代では世界に誇り得る知識と技術を持つと



写真1：平成時代のJSSH・JSHT連携メンバー：
左から：阿部宗昭MD、椎名喜美子HT、上羽康夫MD、小野敏子HT、櫛部 勇HT。

思う。しかし、両学会の連携の在り方にはまだまだ検討の余地がある。その連携について深く考える機会が昨年2回あった。初回は2019年6月17日～22日にベルリンで開催された第14回手外科学会国際連合 (IFSSH) と第11回ハンドセラピー学会国際連合 (IFSHT) 共催の学会に出席した折であり、2回目は昨年11月15日に日手会名誉会員でありJSHT顧問であった阿部宗昭先生が逝去された折であった。

ベルリンでの14th IFSSH & 11th IFSHT共催学会はドイツ人ばかりでなく、多くのヨーロッパ

手外科医・ハンドセラピストが学会運営に当たり、推定約2000人もの参加者が集まった(写真2-A)。冒頭の式典ではEUおよびドイツ国の手外科学会会長・ハンドセラピー学会会長が交互に登壇され、挨拶をされた(写真2-B)。学会場には大小様々な部屋が15近



写真2-A：14th IFSSH & 11th IFSHT
プログラム表紙



写真2-B：14th IFSHT & 11th IFSHT代表者と挨拶

くもあり、各部屋で発表・討論が並行して行われた。手外科の新手技とかHT新法などを発表する部屋も活発であったが、一番多くの人を集めていたのは手外科医・ハンドセラピスト合同研究の成果を発表した腱縫合後リハビリテーション法とか神経縫合法後の知覚回復促進法を発表し、討論する会場であった。そこでは、医師とセラピストが対等に発言し、討議していたのが印象的であった。展示場には手外科手術器具とハンドセラピー使用器具が陳列されていたが、それ以外にも我国で見たことのないSilent Auctionが設営されていた。手に関連する種々な物品がテーブルの上に並べられ、買いたい人が希望する値段を記入し、最終的には最高値を記入した人に落札されていた。手外科学会とHT学会との連携が至るところで目についた。その会場風景を見て、今後は我国でも手外科学会とHT学会もこのような良好な連携を持ちたいと念じた。

第2の機会は昨年11月15日に日手会名誉会員・日本HT学会顧問の阿部宗昭先生が逝去され、先生の業績を振り返った折であった^{文献2,3)}。彼が整形外科教授として医学・医療・教育の各分野で成された功績は極めて大きい。整形外科の中でも肘関節を含む手外科の発展には大きな役割を果たされた。若き日には近畿手の外科症例検討会の設立に関与し、第3回手外科学会国際連合(IFSSH)京都学会では委員を務められ、やがて日本手外科学会の種々の委員・役員を務められた。そして、平成7年に第12回中部日本手の外科研究会、平成9年に第9回日本肘関節学会、平成10年に第24回日本骨折治療学会、平成13年に中部日本整形外科災害外科学会、平成16年に第47回日本手外科学会などを主催された。

大阪医科大学では医学生、教職員、同門会員などの教育・指導に従事しながらハンドセラピストの育成にも情熱を注がれていた。1984年に米国テネシー大学に留学された阿部先生はその折にHTの重要性を再確認されたようだ。前述したProf. Hunterら編纂“Rehabilitation of the Hand”の3rd ed.翻訳にも尽力され、1990年に出版された津山直一・田島達也監修「ハンター 新しい手の外科—手術からハンドセラピー、義肢まで」、協同医書出版社の発刊に寄与され、我が国の手外科・ハンドセラピーの発展に大きな貢献をなされた。更に、大阪医科大学の作業療法士であった櫛部勇OT、谷村浩子OTらを積極的に指導・教育し、JSHT会長にまで育てあげられたのみならず、その後も藤原英子HT、西出義明HT、越後歩HTを初め数多くの優秀なハンドセラピストを育成された。その業績には唯々敬服するばかりである。ただ、このような偉大な業績が阿部宗昭教授業績録に殆ど記載されていないのは遺憾である。不必要な派手さを好まぬ彼の人柄を想い起させる。

20世紀中期の手外科は戦傷、交通事故、工場災害などによる手の外傷の手術治療に重点を置き、その後の機能回復はハンドセラピスト達に委ねるのが主流であった。20世紀後期になると外傷ばかりでなく、指再接着、Volkmann拘縮、先天異常手などの知覚・形態の改善とADL改善を目的とする手術と手リハビリテーションが重視されるようになった。そして、21世紀のAI時代に入ると、手の運動・知覚・形態機能ばかりでなく、神経伝達能力や脳機能を含む手と脳との連合能力や社会的役割が重視されるようになった。コンピュータの過使用に伴う母指CM関節症や痙攣性手の予防と治療、先天異常手の精神的・機能的改善などが要求される時代となった。現代のCashless時代には手と脳との連合能力が当然必要となる時代である。言い換えれば、現代の手外科医は単に損傷組織Impairmentを修復する手技のみを考えるのではなく、治療によって患者の日常生活・社会生活がど

れほど改善できるかをも配慮しなければならない時代になったのである。手の機能障害に伴う人間のDisabilityやHandicapの課題に積極的に関与するのが手外科医の責務なのである。現代の手外科医にはハンドセラピストの協力は必須である。個人レベルだけではなく、学会レベルでの教育システムも必要な時代となっている。今年の東日本-、中部日本-、九州-手外科研究会は奇しくも同日の令和2年2月1日に開催された。第37回中部日本手外科研究会と第7回中部日本ハンドセラピィ研究会は出雲市で共催された(写真3)。現在では手外科学会とHT学会の共催は珍しくなく、手外科医とハンドセラピストとの交流も盛んである。しかし、手外科学会場にハンドセラピストの姿は多く見かけるものの、ハンドセラピィ学会場に手外科医の姿を見るのは稀なのが現状である。我国における手外科学会とHT学会の在り方をもう一度見直し、手の使用が不可欠である現代だからこそ、両者が一緒になって真剣に考える課題ではなかろうか。最も適切で効率的な治療法を開発して手の機能障害を極力少なくし、手の障害を予防する研究と普及には手外科学会・ハンドセラピィ学会のより良き連携が重要であろう。

末筆になりましたが、この原稿を書くにあたりJSHT資料を提供して頂いた第32回日本ハンドセラピィ学会長: 西村誠次教授、前JSHT事務局長:大森みかよHT、現JSHT事務局長:蓬莱谷耕士HTに深謝します。

文献

1. 権名喜美子: 日本ハンドセラピィ学会設立への途。ハンドセラピィ No.1、K.K.メヂカルプレス、pp.1-6, 1991.
2. 大阪医科大学整形外科学教室同門会会報No.25 (教室開講50周年記念特集号)、2002年5月25日。
3. 大阪医科大学整形外科学教室同門会会報No.33 (阿部宗昭教授退職記念特集号)、2006年3月25日。



写真3: 第37回中部日本手外科研究会・第7回日本ハンドセラピィ研究会プログラム表紙

手外科バトンリレー (第6回)

心に残った米国手外科医の先達たち

— 40年前の日記から —

生 田 義 和

ハイデルベルク大学への留学からの帰途アメリカ合衆国に立ち寄り、活躍されていた手外科医を各地に訪問した。当時の日記を読み返しながら、心に強く残った6人の先達の生き様を敬愛の念を持って書き残しておきたいと考え、筆をとった。

Dr. William J. Littler (1915-2005) : Roosevelt Hospital, New York

1972.1.12. (水) 13時半、病院に到着。14時にDr. Littlerの手術が始まる。デュピュイトラン拘縮に対する掌側のZ形成とボタンホール変形に対する矯正手術。側索と中央索を切断し、側副靭帯を切除。術後、ボタンホール変形に対する手術の理論的根拠を、手術に使用していた覆布にペンで図を描きながら丁寧な説明を受ける。私はこの布の図の部位を切り取って持ち帰り、今は額縁に入れて保存している(図1)。外科医は上手な手術が出来る事と同時に、優れた教育者でなければならない事を肝に命じた日であった。



図1 手術覆布に描かれたDr. Littlerの説明図

Dr. James M. Hunter (1925-2013) : Thomas Jefferson Hospital, New York

1972.2.2. (水) 午前9時、病院に到着、10時半に手術室に入りDr.Hunterの手術見学。母指IP関節のやや中枢で切断された屈筋腱のadvancement、指神経縫合、先にadvanceした屈筋腱を前腕にて延長。その他2例の手術。翌日術後患者の外来診察と機能訓練室を見学しながら、手術手技と同等、あるいはそれ以上にハンドセラピスト(当時はまだこの職種は独立していなかったと思う)の組織的な後療法の重要性がよく理解できたし、白人と有色人種の組織癒着(癒痕形成)の程度の差も初めて実感した。

Dr. Raymond Miller Curtis (1914-1994) : Union Memorial Hospital, Baltimore

1972.2.4. (金) 午前8時半病院到着後すぐ手術室に案内されて手術見学。デュピュイトラン拘縮に対する手術。麻酔は手関節掌側に横切開を入れて正中神経の神経外膜内に局麻剤を注入。広範囲の腱膜切除とPIP関節の拘縮に対する両側の副靭帯の切除。他指では掌側の関節包の切離。細心の注意を払った実に鮮やかな手術。洗浄水は生塩水ではなく、脳外科手術で使用する「Tis-u-Sol

(PH6.0) (Physiological Irrigating Solution)。創閉鎖前の術野にステロイドを噴霧。術後包帯固定の表層にさらに圧迫包帯を巻き、15分後に圧迫包帯のみを除去。病室にて術後の腫脹治療の装置JOBST (Intermittent Compression Unit) を初めて見る。その他末梢神経修復の治療成績は正しく証明するために精神科医との共同プロジェクトを作るべきであるとか、腱の手術は腱のみに注目する事なく「Muscle Tendon Unit」として考えるべき事など、手外科の基本概念を丁寧に説明して下さる。手術はまさに理論に裏付けられたmeticulousと呼ぶに相応しく、米国での見学旅行中最も感銘深い数日間を過ごした。図2はボタンホール変形に関する治療方針の概略をDr. Curtisご自身で書きながら教えて下さったメモ。

著者が切断指再接着に成功した後に製作した学術映画「Finger Replantation」の16ミリ映画を8ミリ映画に焼き直してお礼に送り、数年後にUnion Memorial HospitalのVisiting Professorとして招待を受けて再度Baltimoreを訪れたことも懐かしい。



図2 Dr. Curtisメモ用紙上の手書きの説明図

Dr. Lee W. Milford (1922-2013) : Campbell Clinic, Memphis

1972.2.21. (月) ニューヨークからグレイハウンドバスで、途中猛吹雪に閉じ込められて4時間の立ち往生の結果、44時間半かけて午前3時に到着したメンフィス。5時間後の午前8時にCampbell Clinicを訪問し、Dr.Milfordの外来へ。手の疾患が少なく、先生が「手の外科じゃなくて、足の外科クリニックだね」とこぼされる。昼食の後City Hospitalに移動して手の外科外来。その後手術室に入り母指球部の脂肪腫切除術見学。17時半より、先生の手の外傷についての講義。22時に終了して先生ご自身がYMCAまで送って下さる。先生との会話の中で、2年先の1974年に日本に行くかもしれないとのこと。後に知ったのは、これがあの第1回日米手の外科合同会議であった。滞在期間中の先生の温かく接して下さる細やかな心遣いが嬉しく、訪問者にはかくあるべきとの感慨を抱いてメンフィスを後にした。

Dr. Harold E. Kleinert (1921-2013) : Jewish Hospital, Louisville, Kentucky

1972.2.24. (木) 午前中Dr. Kleinertの外来診療を見学。屈筋腱損傷に対するシリコンロッドの挿入術後。小児の屈筋腱内ガングリオン。伸筋腱断裂。手根管症候群。示指粘液嚢腫。小児の屈筋腱損傷に対するシリコンロッド使用。大菱形骨のシリコン置換術後脱臼。指神経損傷の神経縫合術後。腕神経叢麻痺への装具療法。テニス肘。ワンネック変形術後。マレット変形に対するキルシュナー鋼線固定などアメリカ全土から来院する膨大な数の患者。深夜23時になっても外来診療は終わらない。手術に関しての説明は、屈筋腱損傷に対しては一次縫合、縫合に使用する糸はモスリンの5-0でクリスクロス法。接合部の周囲を6-0でランニング縫合。運動開始は翌日。伸展側にスプ

リントを当て、屈側にゴムを掛けるなどを丁寧に説明して下さる。翌日は早朝から Dr. Kleinert の手術見学。デュピュイトラン拘縮。深層から皮膚に入り込む小さな血管を温存し、指神経から皮膚に伸びる細い知覚枝も温存する極めて丁寧な手術。Z 形成術では皮膚のみを切り、皮下組織は温存すべしと。翌日も Dr. Kleinert の手術見学。母指グロームス腫瘍。極めて丁寧な分離で血管茎を露出して切断。皮膚欠損に対しては上腕より全層植皮。



図3 農場の搾乳所を点検するDr. Kleinert

16時にDr. Kleinertに連れられて病院を後にし、彼の所有する1700エーカーの農場へ。牛は約600頭、馬もいるとのこと。先生と一緒に搾乳作業所を見た(図3)後、息子さんの持ってきてくれた長靴を履いて農場の牛を見て廻る。先生の農場のマネージャーと土地を耕す新しい形の鋤のデザインについて話し合い、農場に建っている小屋に立ち寄って花に水遣り、犬に餌をやり再び病院に帰る。明日上海に出発する為の準備があるとのこと。今考えれば、日中国交回復の次の年で、American Medical Missionの一員としての中国訪問前夜であった。先生が上海で講演する予定のスライド、1) 腱の修復(Tendon repair)、2) マイクロサージャリー(Microsurgery)、3) 血管外科(Vascular surgery)の3セットを私一人の為に3時間半かけて講演。世の中にこんな外科医がいるのかと感激の極み。さらに個人的な話題として手の外科は1951年に初めた由、現在臨床例は3万例以上とのこと、空軍に在籍していて階級はgeneralであったが退職したとのことや子供が5人いる事など、実に気さくで親切。お会いして初めてわかる温かい人柄。頭が下がる。感謝一杯。23時近くに先生の運転するフィアットで家まで行き、彼が料理したステーキ、ポテト、サラダにて食事。夜中24時を回った頃、息子さんの車でYMCAまで送ってもらい、長かった1日が終わる。優れた外科医であると同時に、牧場主、家庭人、見学者に対する家族のような対応。人としての生き方を学んだ。

Dr. Herbert Stark (1922-1990) : Good Samaritan Hospital , Los Angeles

1972.3.12.(日) 体力を考慮し、バス移動を諦めて飛行機にて東海岸から西海岸に移動しLos Angelesに到着。翌日Dr. Starkの手術見学。指の神経縫合時に魚釣用の錘を支持糸固定に使用。皮膚縫合は36番鋼線にてマットレス縫合。止血帯を除去してから皮膚縫合。DIP関節固定に関節面切断はシェブロン型(襟章の山形)。固定に失敗した場合は多少動く関節となるとのこと。手掌部の圧迫に綿のワタではなくsteel woolを使用するなど文献では窺い知る事が出来ない無数のアイデアを見学する。魚釣用具やスチールワイヤーなどが医療用としての使用認可を受けているとは考えられないが、身近な日用品でも手術に利用価値のあると考えられるものは躊躇なく利用していることが想像され、以後の著者の手術機器に関する重要な示唆を得る。

Dr. Jack W. Tupper (1925-2006) : Samuel Merritt Hospital, Sacramento

1972.3.20. (月) バスでサンフランシスコに移動し、対岸のサクラメントのDr.Tupperのオフィスを訪ねて外来診察を見学。臍移植、ロッドを使う二次的な臍移植、反射性交感神経性ディストロフィー、デュピュイトラン拘縮など。ここでも手掌の圧迫にsteel woolを使用。手関節固定術に歯科医が使用する器械を自分で変形させて使用。これはドイツのメーカーに製品として製作依頼中。外来の工作室には様々な手術器具を製作中。例えばスプーンとかフォークを変形させて筋鈎の如きものを作成、工具のピンバイスを医療用に変形など実に興味深い作業場で強烈な刺激を受ける。

Dr. Robert L. Brown Old Dr. Sterling Bunnell's Office, San Francisco

1972.3.23. (木) Sutter StreetのDr. Sterling Bunnell OfficeへDr. Niebauerを訪ねたが留守。代わりにDr. Robert L. Brownが対応してくれ、Dr. Howardが学生や研修医のために執筆した図解の小冊子「デュピュイトラン拘縮」、「手の外科に於ける形成術」、「手の小さな骨の骨折治療」および「手の手術の後療法」をプレゼントしてくれる。これを持ち帰り、津下先生にお見せしたところ感心され、これが「手の外科アトラス」の発刊を思いつかれたという経緯がある。なおwebによるとDr. R. Brownは現在 (2020) でもミネソタ州にて現役で医療に従事しているようである。

極寒の東海岸から温暖な西海岸までの多くの町の多くの手外科医先達の現場の見学と多くの若い手外科医達との交流を終えたのち、留学期間である1972年3月末に広島に無事帰り着いた。

最後に当時のNew Yorkで偶然撮影した写真一葉 (図4) を添付したい。それはアメリカ合衆国経済発展の象徴であった世界貿易センタービルで、下層階では入居が始まっていたが上層階は未だ建築中であり、その壮大な外観に圧倒された記憶がある。1993年のテロ爆破をテレビの実況中継で見ながら、1972年当時のビルの姿を思い出していた。



図4 最上部が建築中の世界貿易センター

Joy の声 (第 3 回)

歩んできた道: 1 人の女性手外科専門医として

原 友 紀

筑波大学医学医療系整形外科 講師

大学院に入学し、末梢神経を研究。そして手外科を志す

医師としての初心は「名医になれずとも良医になれ」。出身大学：山口大学入学式での学部長の祝辞です。学生時代に大学院で研究する意義についても学ぶ機会があり、卒業後所属した筑波大学整形外科でも大学院に進学することは決めていました。大学院では末梢神経の研究に熱中しました。研究があまりにもおもしろかったので卒業後も研究を継続しながら、手外科・末梢神経外科医としての臨床研修を始めました。

手外科専門医に至るまで

手外科専門医制度が開始された時、移行措置で試験なしで専門医になる資格はあったが、当時の自分は知識・技量とも専門医を称号するに満たないと考え、あえて申請せず。

そこから数年、恩師 落合直之名誉教授・西浦康正教授の下で手外科の臨床経験を積みました。昨今、男女共同参画の議論を多く見聞する中で、自分が恵まれていたのは職場環境であったと悟りました。当直をしていなかった時期も一人の手外科研修医として、病棟業務や手術の機会を他の医師と同等に与えてもらえたこと、そのことが手外科専門医を目指す上でどれほど大きいことであったか。落合教授の外来に数年張り付いて、手外科にとどまらずあらゆる疾患の診察・診断をいかに行うかを学びました。手外科の手術や後療法を直接指導下さった西浦教授は、何もかも拙い私に一切からすべてを教えて下さいました。落合教授の下、筑波大学整形外科では男女共同参画は当然の如くで、議論も必要なかったと思います。自分に納得できた段階で、手外科専門医試験を受験、合格時の達成感は大きなものになりました。

手外科専門医として

手外科は知れば知るほど魅了される学問であり、極めるという域に達することは生涯ないように感じています。常に挑戦者であり、目の前の1例1例にじっくり向き合い、より良い治療を探求する毎日はとても充実しています。より難しい症例の治療にあたるには、知識と技量を深めていくための素地が必要です。手外科専門医を目指すことはこの基本を積み上げていくことです。多くの女性医師にも手外科専門医に挑戦してもらいたいと願い、現在は日本手外科学会キャリアアップ委員会の一員として、日手会の男女共同参画に取り組んでいます。

Acknowledgmentは我が家族に

育児と仕事の両立における悩み・葛藤は、愛するが故であり語れない程多くあります。医師としての信念をまげられないのが私の生き方。そんな母を見捨てないで遅く育った我が子たちは天晴れです。



2012年 落合教授ご退官前最後の教授回診にて。



2016年 学会で西浦教授と記念写真
困ったときいつも助けて下さいます。



2017年日手会学術集会(名古屋)
筑波大学手外科の次代を共に担う仲間と。

物故会員への追悼文

阿部 宗昭 先生を偲んで

美杉会佐藤病院 手外科センター 白井久也

阿部宗昭先生は腹部の癌により2019年11月15日にご逝去されました。2019年初頭はお元気でしたが、3月頃から心窩部痛を生じて精査で癌と判明。過去全出席の日手会では2019年4月の学術集会は欠席され、ご心配された先生も多くおられたと思います。その後、手術を乗り越えられ、お元気な姿を同門の前に見せていただきました。これからも癌と戦うのやと力強いお言葉がありましたが、容体が悪化し母校の大阪医科大学付属病院でご逝去されました(享年79歳)。

阿部先生は1941年のお生れで、1970年に母校の大阪医科大学の助手になられ、講師、助教授を経て1996年整形外科教室の教授に就任されました。2006年の退職までの36年間、大学病院で最前線の治療に携わってこられました。最初は当時花形であった小児整形を希望したが空席がなかったので手外科班に属したように聞いています。退職後は関連の民間病院に勤務され、ご逝去の前日までメスを握っておられました。

私は阿部先生に最も長く大阪医科大学でご指導いただいたものです。私が1989年に29歳で大学院に戻って以降、助手、講師時代含めてご一緒に仕事をさせていただき、2006年の阿部先生の退職までの17年間、公私に渡りお世話になりました。手外科の診察方法や手術の技術を教わったのは阿部先生、自身の学位論文を一から十までお世話になったのは阿部先生、海外での初発表のご指導いただいたのは阿部先生、自身のアメリカ留学をバックアップしていただいたのも阿部先生で、恩師そのものでした。声を荒げることのない優しい先生でした。

阿部先生は真っ黒な髭をはやし、普段からネクタイを着用され服装はピシッと決められたダンディな先生でした。興味深い疾患や外傷はこまめにノートにメモされ、1症例ずつを大切にされていました。小児の肘関節部外傷、先天異常、モンテジア骨折などの分野で日本の第一人者になられたのは日々の積み重ねの結果だと納得できます。1981年に提唱された小児上腕骨顆上骨折の転位度の分類(阿部1-4型)は今日の論文でもよく引用されています。文献は大きな書庫内にきれいに整理されておられ、“こんな報告があるのは知ってか?”と先生自身の文献をよく見せていただいたものです。論文検索やダウンロードをPCで容易にできなかった時代では大変有用でした。1980年代はX線フィルムの時代でしたが、そのフィルムが処分されないよう大切な疾患は阿部コレクションとして書庫に保存されていました。また、術後フォロー-を大切にされる先生で、助教授時代は週2回早朝に部下を連れての手外科回診をされ、その際にベットサイドで診かたや装具療法の仕方を教わりました。阿部先生は晩年まで論文を書かれ、逝去される年に J Shoulder Elbow Surg. 2019, Idiopathic anterior dislocation of the radial head: symptoms, radiographic findings, and management of 8 patients. が掲載されました。頭が下がる思いで小生にはとても追い付くことはできません。

作業療法士への指導も大変熱心な先生でした。手の外科グループでは毎週J Hand Surgeryの抄

読会を20年以上継続していましたが、その抄読会にOTを呼んで全員で勉強しようという教育熱心な先生でした。優秀なハンドセラピストが大阪医大から多数育ったのは阿部先生のご指導の賜です。先生は日本ハンドセラピー学会の顧問を2008年から2019年まで担当され、逝去される直前の一言が、“僕はもう復帰が叶わなくなった。みんなどうか頑張って、手外科の発展に貢献してください。また、セラピストと仲良く連携するように”でした。

阿部先生は学生部長を兼任されていたこともあり、ベッドサイドの学生を大事にされ、常々くばりをされていました。医局カンファ中はよく、“人工股関節置換術後の三大合併症は？”という学生への恒例質問があり、脱臼・感染・ゆるみと答えた学生を褒められていたのはまだ記憶に残っています。

多くの学会、研究会の会長を歴任されましたが、私には事務局責任者になってしんどい思い出もありますが、今では懐かしくかけがえのない経験となりました。特に2004年に第47回日手会を開催された時は教室員一同が全力で準備し、成功裏に終わることができました。2019年流行語大賞のone teamであったと思います。その他、ご一緒したゴルフの思い出、テニスの思い出、阿部先生宅で奥様からごちそうになったディナーの思い出を含めて仕事外でも本当にお世話になりました。どうか安らかに眠り下さい。



1. 1998.5 第7回国際手外科学会がカナダ、バンクーバーで開催され、立ち寄ったバンフのアップー温泉にて。前列左から小生、2人目阿部先生、当時57歳、3人目は田中寿一先生、ほか手の外科スタッフ達と。大変楽しかった国際学会で一生の思い出でした。



2. 2004.4.22 第47回日手会を開催され(当時63歳)、懇親会後のスナップ。中央はご招待したウエストバージニア大学教授の故J. Ryu先生ご夫妻。私の留学先の先生でもありました。右お二人が阿部先生ご夫妻。



3. 2005年、64歳時の阿部教授の回診。笑顔が素敵です。

委員会報告

■常設委員会

財務委員会

委員長 山本真一

2019年度財務委員会のメンバーに交代はなく、担当理事に平田仁先生(名古屋大学)、委員に金潤壽先生(太田総合病院)、富田一誠先生(昭和大学江東豊洲病院)、中道健一先生(虎の門病院)、原章先生(順天堂浦安病院)、別所祐貴先生(永寿総合病院)と委員長に山本真一(横浜労災病院)で構成されています。外部アドバイザーである長尾謙太税理士と事務局の中尾和宏氏とともに、毎年の学会収支決算と予算案や長期的な財務計画などについて審議しています。

2019年度財務委員会は、第1回を3月18日に、第2回を12月17日に東京都千代田区麹町のコングレ東京本社内の会議室で開催し、対面参加できない先生はwebで参加しました。

第1回では平成30年度収支決算と2019年度予算案を理事会に提出し、4月18日の代議員会(札幌)で承認されました。

平成30年度収入に関しては、第61回学術集会(東京)開催収入の約1350万円増などから、合計約1910万円増となりました。支出は、学術集会開催費が約1330万円増となりましたが、事業費全体としては委員会費・インターネット関連費用・出版関連費用などの減少があり、租税公課を含む管理・事務費と合わせても、予算案から約330万円減少となりました。なお、平成30年度の法人税・消費税等は約458万円でした。これらにより、平成30年度収支は約1450万の赤字の予定が、約810万円の黒字となり、正味財産残高は約1億6460万円となりました。

第2回では10月末での2019年度収支状況と2020年度予算案が報告されました。なお、事務局移転に伴いアイ・エス・エス 上甲・酒井氏も同席しました。

2019年度請求分から年会費に国際会費(専門医正会員)が含まれており、第62回学術集会(札幌)収支は未確定ですが、事業費で増額した機関誌発行やインターネット関連費用、減額を目指した管理・事務費についても概ね予定通りに推移しているとの報告がありました。

2020年度新規事業計画案として、広報・渉外委員会から手外科の認知度向上を目指す事業、社会保険等委員会から1%エピネフリン含有キシロカイン適正利用ガイドライン作成、情報システム委員会からオンライン入会・決済、専門医管理システムの第2フェーズなどが計上され、合計約3930万円となっています。また、アイ・エス・エスより運営事務費(約1500万円)と、第63回学術集会(新潟)

の収支予算書(開催収入約7680万円)が提示されました。収入は約1億3880万円(学術集会収入を含む)が見込まれており、支出では委員会費の30%減額が維持され、租税公課として法人税・消費税約500万円を想定しています。すべての事業が行われるとすると、約410万円の赤字となる見込みです。また、2021年3月にハワイで開催される第7回日米手外科合同会議に向けて、日手会として準備を進めている旨の報告がありました。

今後は日手会財務の改善を目指す所存であります。会員皆様の御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

教育研修委員会

委員長 川崎 恵吉

平成31年度教育研修委員会のメンバーは、担当理事砂川融、委員今田英明、小笹泰宏、坂本相哲、島田賢一、中山政憲、成島三長、村田景一各先生(五十音順)と委員長川崎恵吉で構成されております。

本年度も例年通り、当委員会の主たる活動である春期ならびに秋期教育研修会、キャダパーワークショップを開催しました。第25回春期教育研修会は、アステラス製薬株式会社の協力を得て、第62回学術集会の翌日の令和元年4月20日(土)に札幌コンベンションセンターで開催されました。6題の講演が行われ、参加人数は135名でした。第26回秋期教育研修会は、旭化成ファーマ株式会社の協力で、8月31日(土)・9月1日(日)に北海道立道民活動センター「かでの2・7」で開催されました。参加人数は131名で、10題の講演と1題のランチョンセミナーが行われました。参加人数は例年より少なく、その原因としては札幌での学会開催が続いたことが最も影響したのではないかと考えられました。来年度以降の動向次第で更なる検討の必要性があります。

秋期教育研修会前の令和元年8月29日(木)・30日(金)の2日間、札幌医大解剖学教室で第4回カダパーワークショップが開催されました。札幌医大の解剖実習室が前年度にリニューアルされ、より快適な実習室でした。また、カダパーワークショップで用いられる撮子やハサミなどの器具類も本学会で新規購入しました。内容は、手関節鏡コースと皮弁コースがあり、各々6名と28名の参加がありました。中村俊康先生(関節鏡関連)、成島三長先生(皮弁関連)の講義のあとに実技が行われました。特にマイクロフィルを注入したキャダパーは好評であり、アンケート結果から非常に高評価をいただきました。今後はより有意義なキャダパーワークショップとなるように検討し、次回開催につなげていきたいと存じます。

令和2年度は、第27回春期研修会を第63回学術集会の翌日の4月25日(土)に新潟で、第28回秋期研修会を8月22日(土)・23日(日)に京都で開催する予定です。

令和2年度を最後に春期教育研修会の企業による共催が困難となり、3年度から中止せざるを得ない状況となっており、全国の会員の皆様方にとって有意義かつ利便性のある方法としてweb講習会を中心に代替案を検討中です。今後もできるだけ皆様の意見を取り入れながら、よりよい研修システムの構築に全力を注いでいきます。平成31年度から金谷耕平先生より川崎が委員長を引き継ぎました。まだまだ力不足ではありますが、今後ともご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

編集委員会

委員長 河村 健二

2019年度の編集委員会は、面川庄平担当理事、谷口泰徳アドバイザー、委員長の私と24名の委員（池口良輔、池田全良、入江弘基、岩部昌平、江尻荘一、岡田貴充、小田良、長田伝重、佐藤和毅、関谷勇人、田鹿毅、峠康、長岡正宏、西田圭一郎、西脇正夫、二村昭元、林原雅子、藤田浩二、古川洋志、堀井恵美子、松崎浩徳、松村一、村瀬剛、森谷浩治）の構成で活動してきました。

2019年度の編集委員会の主たる活動内容は、日本手外科学会雑誌（第36巻）の発行と第3回日本手外科学会奨励賞（田島達也賞・津下健哉賞）の審査・選定です。第一回編集委員会を、第62回日本手外科学会学術集会開催期間中の2019年4月18日に札幌コンベンションセンターで行い、投稿及び査読の円滑化を目的とした投稿規定の改訂案が議題にありました。後日に編集委員会でのメール審議を経て投稿規定改訂版を作製し、理事会での承認を得て、第36巻の投稿から改訂版が適用となりました。主な改訂点は語句や句読点の表記方法の統一化、カラー図表掲載への対応（有料）、他誌転載時の出典明記などです。症例報告にも対応出来るように投稿フォーマットも一部変更しました。また、2019年5月31日より会員以外からの論文購入費用を一編につき500円から1500円に値上げしております。第3回日本手外科学会奨励賞については、公募の中から2名の候補者を編集委員会で選定し、理事会での承認を得て、田島達也賞は萩原祐介先生（日本医科大学/湧水方円会稲田病院）、津下健哉賞は前田和洋先生（東京慈恵会医科大学）に決定しました。両先生は2020年4月22日に新潟市で開催される総会で表彰される予定です。

日本手外科学会雑誌（第36巻）への投稿論文数は2020年2月の時点で、総数250編、採用237編、不採用9編、審査中4編です。前年度（第35巻）の投稿総数315編と比べると減少しておりますが、前々年度（第34巻）の投稿総数250編とは同数です。投稿論文のほとんどは、学術集会発表論文であるため、投稿数は当該年度の学術集会での発表件数にも影響されると思われます。投稿される論文には、洗練された質の高い論文がある一方で、投稿規定に沿っていない問題のある論文も含まれています。会員の先生方には、論文投稿前に投稿規定を今一度ご確認して頂くようお願い申し上げます。36巻の発行状況としましては、2号は2019年11月25日、3号は2019年12月23日、4号は2020年1月27日、5号は2020年2月17日に順次発行され、6号は2020年4月20日の発行予定です。遅滞なく発行業務を遂行するためには、査読委員となっておられる代議員の先生方のご協力が不可欠です。この場を借りて深く御礼を申し上げますとともに、引き続きご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

機能評価委員会

担当理事 中村 俊康
委員長 洪 淑貴

機能評価委員会では中村俊康理事のもと、委員長洪以下5名で活動しています。

前期からの継続事業としては、日手会ホームページ上で機能評価に関する情報を整理し、掲載することです。事務局移転の影響があり、長期間ホームページの更新がされないままになっていますが、今後早急に精密知覚検査（SWテスト）マニュアル、日手会推奨指角度計、推奨握力計について掲載し

ていきます。また、変形性手指関節症機能評価Functional index for hand osteoarthritis (FIHOA) 日本語版、デジタル角度計について、パブリックコメントを募集する予定です。新規事業としては、回内外可動域測定法を再検討する予定です。1974年に制定された日整会・日リハ会の回内外可動域測定法は、基本軸を『床に垂直』、移動軸を『伸展した母指を含む手掌面』としており、機能的な評価には手掌の向きを計測する本法は適していますが、手関節内(手根骨間)の回旋や手関節掌背屈による代償動作を含む可能性があり、厳密な『前腕の動き』を表していません。アメリカハンドセラピー学会も前腕回旋の測定法として遠位橈尺関節部での測定法を推奨していることもあり、新規事業として回内外可動域の測定法を日本ハンドセラピー学会と共同で検討していく方針です。

国際委員会

委員長 村田景一

国際委員会は柿木良介担当理事のもと、岡田充弘、金谷文則、建部将広、平田仁、藤尾圭司、吉田綾、村田景一の7名の委員から構成されます。今年度の活動の概要を報告します。

ASSH (米国)、HKSSH (香港)、KSSH (韓国)、TSSH (台湾) Travelling Fellowを選出

書類審査と英語によるプレゼンテーションと質疑応答を取り入れた選考を行い、2020年のJSSH-ASSH Travelling Fellowとして市原理司先生と河村健二先生の2名を、Asian Exchange Travelling Fellowとして小笹泰宏先生、友利裕二先生、名倉一成先生の3名を選出しました。各先生の希望を聞き、小笹先生はJSSH-KSSH Fellowとして韓国を、友利先生はJSSH-TSSH Fellowとして台湾を、名倉先生はJSSH-HKSSH Fellowとして香港をそれぞれ訪問する事になりました。応募者のcompetitionは厳しくなる一方で、選考に苦慮しました。今後も意欲溢れる若手会員の応募を期待しております。

Bunnell Fellow、HKSSH、KSSH、TSSH Fellow来日

2020年4月23、24日に坪川直人会長のもとに新潟で開催される第63回日本手外科学会学術集会には、2020 Bunnell Fellowに選出されたDr. Amy Moore (Department of Plastic and Reconstructive Surgery, The Ohio State University, USA)、HKSSH FellowとしてDr. Angela Ho (Caritas Medical Centre, Hong Kong)、KSSH FellowとしてDr. Il Jung Park (Department of Orthopedic Surgery, Bucheon St. Mary's Hospital, The Catholic University of Korea)、TSSH Fellowとして Dr. Chen-Yuan Yang (Division of Hand and Reconstructive Microsurgery, Department of Orthopedics, Kuang Tien General Hospital, Taiwan) が来日されます。坪川会長のご高配により、学術集会ではTravelling Fellow Sessionが設けられ、日本のFellowと共に発表をしていただきます。Fellowは日本各地の施設を見学されますので、ホストの先生にはどうぞよろしくお願いたします。

第7回日米手外科合同会議のサポート

2021年3月27日～29日、ハワイ、オアフ島、Sheraton Waikikiホテルにて第7回日米手外科合同会議が開催されます。学会準備は日米手外科合同会議準備委員会を中心に進められますが、国際学会はそのサポートを積極的に行う予定です。

広報渉外委員会

委員長 佐竹 寛史

2019年度広報渉外委員会は平瀬雄一理事、白井久也前委員長、岡崎真人先生、辻英樹先生、大江隆史先生、岸陽子先生、寺本憲市郎先生、大谷和裕先生と佐竹で活動を行って参りました。日手会会期中の第1回委員会で白井久也前委員長と岡崎真人先生が任期満了となり、寺本憲市郎先生と大谷和裕先生が2019年5月から新委員になられました。

広報渉外委員会の取り組みは1) 手外科シリーズの新規作成2) 手外科シリーズ過去分の見直し3) 日手会ニュース発行4) ホームページ改訂5) 日整会シンポジウム、パネルディスカッションへの提言を主軸にしております。

- 1) 手外科シリーズ新規作成としては、No.34「手の神経損傷」、No.35「有鉤骨鉤骨折」を現在作成中です。
- 2) 手外科シリーズ過去分の見直しは現在No.12, 13まで進行中です。ホームページから最新の手外科シリーズをご利用ください。手外科シリーズを病院の広報等に利用する場合の使用許諾条件として、a) 営利目的ではないことb) 出典を明記すること(日手会ホームページからの引用であること)c) 加工は加えず使用することd) 掲載誌(紙)を事務局にPDFで提出することがあげられます。著作権は日本手外科学会が保有しております。
- 3) 日手会ニュースは第51号、52号が発行され、日手会前までに53号が発行される予定です。手外科バトンリレーは第6回、Joyの声は第3回までバトンが引き継がれております。
- 4) 日手会ホームページは加藤理事長の「手外科とは」が2019年8月にアップされ、英語版ホームページは日手会主催の教室により随時英語版がアップロードされます。日手会のロゴマークを使用し、バナーでのリンクは広報渉外委員会の承認が必要となっております。
- 5) 日整会2021には「RA Hand—治療の現況—」と「カダバー研修の現状と展望」を提言しました。
- 6) その他

①キャリアアップ委員会

キャリアアップ委員会のホームページにリンクするバナーを日手会ホームページに掲載します。キャリアアップ委員会ホームページはキャリアアップ委員会の責任で作成し、予算もキャリアアップ委員会の予算としていただきます。手外科学会認定研修施設の見学可能施設一覧の情報募集は日手会ニュース内で行い、原稿あるいは結果の集計はキャリアアップ委員会で行っていただきます。

②手外科認知度調査

大江隆史先生のご尽力により「手外科」認知度調査が行われ、第63回本学会で報告予定となっております。「手外科」の認知度は非常に低く、学会をあげて認知度を上げる努力が必要と感じました。認知度調査は本学会の臨時予算で行われました。

③手(ハンド)の日

8月10日「手(ハンド)の日」を国民に啓蒙する手段について早急に検討する必要があります。手段について委員会で審議中です。

④日本医学会総会

2019年4月26日から29日に第30回日本医学会総会が開催され、日手会のこれまでの歩みと進歩についてポスターを展示して参りました。



日本手外科学会



学会の創立 1957年



日本手外科学会の発令式(1957)
1957年(昭和32年)7月7日
神戸オリエンタルホテルにて。
左端で立って挨拶される天児会長。

学会の歩み

第1期(学会創設期 ~1965年)

定款 第2条 目的
この法人は、手及び上肢に関する疾病又は障害に関わる人々に対して、最新の医療情報とサービスを提供し、全ての人が健康で文化的な生活ができる地域社会づくりと社会全体の利益の増進に寄与することを目的とする。

第2期(基本的手術手技確立の時代 1965年~1975年)



玉井 通念先生が1965年(昭和40年)7月27日、23才男性の左母指MP関節脱臼全脱臼に対して、マイクログサージャーを応用して手術で初めて再建術に成功した。

岸で雅直先生がループワイロンキック針を改良し、丸関節脱臼療法を開発され、その後のgold standardとなる(1975)。

第3期(微小外科臨床応用の時代 1975年~1985年)



第22回日本の外科学会(故伊藤忠厚会長、1979)において故伊藤会長が私的に中国の象形文字「手」を取り作成し、講演手帳裏にマークとして採用(左)。

第4期(総合診療の時代 1986年~1995年)

第5期(次世代への飛躍準備期 1996年~2007年)

日本手の外科学会記念誌
20世紀の手の外科
21世紀への飛躍を期待して
2001年(平成13年)3月31日発行

☆設立50周年記念式典を開催
2007年(平成19年)4月19日、山形

第6期(成熟の時代と再生医療、人工材料への挑戦 2010年~)

神経再生誘導チューブが保険適応 2013年
自家培養軟骨が保険適応 2013年

2010年 一般社団法人化、評議員制度から代議員制度へ

| | |
|----------------------|--------|
| 現在の会員数 | 3,504人 |
| 名誉会員 | 28人 |
| 特別会員 | 46人 |
| Corresponding Member | 33人 |
| 理事長 | 1人 |
| 副理事長 | 2人 |
| 理事、監事 | 11人 |
| 代議員 | 248人 |

国際交流

| Traveling Fellowship | |
|-----------------------|----------------|
| アメリカ手の外科学会 | 2000年(平成12年)より |
| 香港手の外科学会 | 2000年(平成12年)より |
| JAPAN Hand Fellowship | 2005年(平成17年)より |

合同会議

| | |
|-----------|---------------------------|
| 日米手の外科学会 | 1974年(昭和49年)より3年毎に第4回まで開催 |
| 日伊手の外科学会 | 2004年(平成16年)より第2回まで開催 |
| 国際手の外科学会 | 開催補助 |
| アジア手の外科学会 | 開催補助 |

専門医制度(サブスペシャリティ)

目的
手外科学の進歩発展を図ると共に高度な専門的知識と技術を修得した専門医を育成しもって国民医療の向上に貢献することを目的とする。基本領域として整形外科が形成外科専門医取得後に、手外科認定施設で〇年研修後に専門医試験で合格が条件、5年ごとに更新
2006年(平成18年)より開始、2018年現在 専門医932名

近年の発展

肋骨助軟骨移植による関節形成術(自家肋骨助軟骨関節全置換術)



2008年(平成20年)7月27日(東京) 4年
FPC(関節、軟骨)、移植(完全治癒)

第1回肋骨助軟骨移植研究会、一対のFPC関節を形成

FPC関節と解剖学的・生物学的に一致

再建(2011年) FPC関節、移植(100%) 関節40%

高木大平先生(右) 高木 昭三先生(左)

手関節による三角線維軟骨複合体(TFCC)の修復術



TFCC修復術の最新技術

手外科シリーズの上映(シムレットは日本手外科学会のHPから閲覧可能です)

コンピュータシミュレーションを用いた手術 カスタムメイド骨接合プレートを用いた上肢の変形矯正手術



シミュレーション通りの手術を実現するためのカスタムメイド手術ガイドプレート

最新の3Dプリンター、加工機で製造

コンピュータ上でデザイン

手鏡1

カスタムメイド手術ガイドプレート

カスタムメイド骨接合プレート

カスタムメイド手術ガイドプレート

高木大平先生(右) 高木 昭三先生(左)

日本手外科学会は、この半世紀にわたり手指外傷の治療、切断指再接着、腕神経意麻痺に対する神経修復と再建術、関節鏡・内視鏡を用いた低侵襲手術の開発、スポーツ外傷などに、時代の要望に応えて革命的成果を挙げ続けてきました。現在の超高齢化社会の日本において健康長寿社会を実現するために、手外科は以下の目標に向かって前進します。

1. 手指の痛み、しびれの病態解明、予防、各個人に合わせた治療の開発
2. 腱鞘炎、手根管症候群、手指変形性関節症の病態解明、予防、低侵襲治療法の開発
3. 再生医療の手指関節軟骨、腱、神経への応用
4. 小児から高齢者のスポーツ活動における肘・手関節・指のケア
5. 手指の関節障害に対する日本人に達した人工関節の開発と普及
6. 手肘の障害に対する実用性の高い覆手の開発
7. ロボット手術、コンピューター支援手術の開発

社会保険等委員会

担当理事 大江 隆 史
委員長 光 安 廣 倫

令和1年度社会保険等委員会は、大江担当理事の下、亀山アドバイザー、岡崎、島田、高瀬、瀧上、鳥谷部、三浦と委員長の光安の計9名で活動を行っております。社会保険等委員会の活動としては、外科系学会社会保険委員会連合(外保連)へ手術、実務、麻酔、処置、検査、ICD11の各委員会へ委員を派遣し外保連活動への協力を行うこと、2年ごとに行われる診療報酬改定に対して新規申請ならびに改定の学会要望を提出すること、また2年ごとに改定される外保連試案に手外科領域における保険診療と実臨床の間の乖離、矛盾があれば要望として収載されるように努めること、学術総会におけるセミナーの実施などを、事業として行っております。

本年度、次年度における実施(予定)事項ですが、

①2020年度診療報酬改定要望結果報告

K037 腱縫合術(新設):前腕から手根部の2指以上の腱縫合を実施した場合は、複数縫合加算として1指を追加するごとに所定点数の100分の50に相当する点数を加算する。ただし、加算は1側当たり3指を超えないものとする。

従来前腕から手根部での腱縫合は、腱縫合を数腱に行っても、加算は得られない状態であったため、実態調査を行った後に、複数腱縫合した場合への加算を要望し、認められています。会員には極めて有益と考えますので、ご確認をお願いします。

K054骨切り術、K057変形治療骨折矯正手術:患者適合型の変形矯正ガイドを用いて実施した場合は、患者適合型変形矯正ガイド加算として、9,000点を所定点数に加算する。

大阪大学の村瀬先生からの改定要望で、従来ガイド加算として6,000点出会ったものに対して、増点が認められています。

②学術総会におけるランチョンセミナーの実施

社会保険等委員会として、三笠製薬(株)の協賛の下行っており、昨年の第62回学術集会でも実施し、本年の第63回学術総会においても(開催が危ぶまれておりますが)、保険診療に関するセミナーを開催させていただく予定です。公正競争規約遵守のため、スポンサードセミナーとしての開催が危ぶまれましたが、保険診療に関して、令和2年度診療報酬改定概要、診療報酬における疑義等について、例年通り会員の皆様へ有益な情報をお届けできるようにと準備を行っております。

③エピネリン含有キシロカインの手指への使用に関する禁忌撤廃について

エピネリン含有キシロカインの手指への使用については、使用が禁忌とされていますが、安全性、wide awake surgeryとしての有用性に関して厚労省、PMDAと折衝の上理解が得られ、学会としての禁忌撤廃への要望書を提出しています。

多岐にわたる活動を積極的に行っている委員会と思っておりますが、今後も会員の皆様からの保険診療に関して要望がある場合には、対応させていただきますので、ご意見を頂戴できればと思っております。

先天異常委員会

担当理事 島田賢一
委員長 関敦仁

先天異常委員会の主な活動内容は、手の先天異常懇話会の開催、日手会手の先天異常分類マニュアルの再検討、手の先天異常症例相談窓口の運営などがあります。本委員会活動により先天異常手の診療に少しでも役立つ情報を発信できることを目標にしています。

手の先天異常懇話会

第63回日本手外科学会学術集会の期間中に、坪川直人会長のご配慮により第58回手の先天異常懇話会を開催する予定です。今回のテーマは屈指症と先天性握り母指です。山形大学医学部の佐竹寛史先生には「屈指症の診断と治療」を、国立病院機構仙台医療センター形成外科手外科の鳥谷部荘八先生には「先天性握り母指の診断と治療」を講演していただきます。本懇話会は日本手外科学会と日本整形外科学会の専門医教育研修単位、日本形成外科学会の専門医資格更新単位を申請しております。また、本委員会では「手の先天異常懇話会のあり方」について、出席者へのアンケートを行い、講演内容の難易度や症例検討の必要性、適切な開催時間などを調査して、懇話会が会員にとって魅力的となるために検討を続けています。

日手会手の先天異常分類マニュアルの再検討

日手会手の先天異常分類マニュアル(改訂版2012年)の問題点の検討を行っています。前回の第57回手の先天異常懇話会において、会員のみなさまからご意見をいただくためにアンケートを実施しており、分析を行いました。日常診療で使用する分類は日手会分類がよく使用されていますが、病態を吟味して治療方針を決定するためには異常形態に対する共通した表現が必要になると考えます。そこで今回は「母指多指症の形態に対する呼称」についての調査を行います。日手会分類では8型に属している、三角指節骨を有する橈側偏位例に対してどのように呼称されているかなどを調査します。

手の先天異常症例相談窓口の運営

日手会ホームページ上で会員向けに運営されている「先天異常症例相談窓口」では、相談症例はまだ少ないですが、メール相談に応じています。似て非なる手指先天異常、骨系統疾患や代謝性疾患に伴う病態は診断に難渋する場合があります。少しでもお役に立てるよう委員会を挙げて対応します。

これからもみなさまのご支援とご指導を宜しくお願い申し上げます。

先天異常委員会：島田賢一担当理事、上里涼子委員、四宮陸雄委員、関敦仁、鳥山和宏委員、福本恵三委員、牧野仁美委員

倫理利益相反委員会

委員長 恵 木 丈

令和元年度倫理利益相反委員会の構成メンバーは、酒井昭典先生(担当理事)、塚田敬義先生(アドバイザー)、鈴木克侍先生(委員)、辻本 律先生(委員)、福本恵三先生(委員)、山我美佳先生(外部委員)、委員長の私の7人体制で活動しております。

当委員会の業務は、全代議員の利益相反に関して審査を行う事であり、特に学会役員や委員会委員就任に関して、倫理的な問題がないかを各自提出された倫理利益自己申告書を元に審査を行い、その結果を理事会に具申することです。前回から過去3年分を提出することとなり、また前回提出より変更がなければ新たな1年分のみを提出していただくことにしており、手続きの簡素化に努めています。新委員に対しては、従来通り過去3年分の提出をお願いしています。本年度は令和2年1月26日にステーションコンファレンス東京に参集し、審査を行い、疑義がある場合はその確認を行い、審査結果を上申しました。

日本手外科学会新入会審査も当委員会の業務です。それに関しては毎月メール審議を行なっています。毎月10-20人程度の入会希望者の審査を行っています。

最近の話題としては、日本医学会がCOI管理ガイドライン改定を検討しており、組織に対するCOIが今後加わろうとしています。個人に対するCOI申告は定着したもので、組織COI申告を実施することで更なるCOI強化を図る趣旨と思われる。従って会員への普及啓発のために、COI・研究倫理に関するセッションを学術総会で設けたり、演題登録時の人に関する倫理研究についてのチェック欄を設けたりなどの変更が必要であることが委員会で提案されました。今後の課題と考えています。

学術研究プロジェクト委員会

委員長 藤 岡 宏 幸

【構成員】

2019年度学術研究プロジェクト委員会の構成員は、酒井昭典担当理事、鈴木茂彦アドバイザー、藤岡宏幸委員長、藤原浩芳委員、荒田順委員、安楽邦明委員です。

【活動内容】

1. 2019年度学術研究プロジェクトの選考

2019年11月4日(月)にアットビジネスセンターPREMIUM新大阪において、2019年度学術研究プロジェクト委員会を開催して、選考を行いました。

応募されたプロジェクトは7課題で、テーマ別の応募状況は次のとおりでした。

- (1) 手外科学分野の高いエビデンスが得られる臨床研究:5件
- (2) 手の先天異常:0件
- (3) 絞扼性神経障害:2件

審議の結果、次の2課題を委員会での候補とし、理事会に付議し承認されました。

● 新鮮凍結屍体を用いた“DARTS人工手関節”の動態解析(代表者:松井雄一郎先生、北海道大学大学院整形外科)

● 手外科分野における炭酸ガス経皮吸収療法の臨床成績(多施設共同研究)～CRPS・四肢関節拘縮・屈筋腱鞘炎などに対する試み～(代表者:善家雄吉先生、産業医科大学整形外科)

また、外部資金があるため別途審査を行った課題「健常者および手関節外傷後の前腕回内・外筋力の調査(代表者:友利裕二先生、日本医科大学武蔵小杉病院整形外科)」を2019年度学術研究プロジェクトとして承認しました。

2. 2020年度学術研究プロジェクト研究テーマについて

助成金の総額は今年度同様に100万円とし、次の3テーマを選定することとし、理事会に諮ることとしました。

(1) 一般テーマ:手外科学分野の高いエビデンスが得られる臨床研究

(2) 選択テーマ:手の先天異常

(3) 選択テーマ:手の変形性関節症

また、「手外科学分野の臨床につながる基礎研究」などのテーマ設定も検討してはどうかとの意見があり、引き続き検討することとしました。

3. 過年度採用プロジェクトの進捗状況について

学術研究プロジェクトに選ばれますと、毎年プロジェクト研究の進捗状況を報告し、プロジェクト終了から1年以内にプロジェクトの成果を日本手外科学会学術集会で発表し、かつ、日手会誌もしくは英文雑誌(impact factorの付与された雑誌を強く薦める)で公表することが義務づけられています。

資料に基づき、過年度採用プロジェクトの進捗状況、助成金の使途、学術集会や論文報告の有無などを確認し、遅れのあるプロジェクトについては、連絡を行いました。

4. その他

「2020年度事業計画」、「2020年度予算案」、および、「2019年度事業計画書(進捗状況)」の審議を行い、理事会に付議しました。

また、西日本地域の委員が多いので、来年度の委員会は2020年10月下旬から11月上旬に大阪で行う方針としています。

学術研究費の有効利用と手外科研究者のモチベーションの向上につながるプロジェクトの選定を目指し努力いたしますので、引き続き、皆様のご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

専門医制度委員会(手外科専門医検討委員会)

委員長 田中克己

◇委員会の現状

本委員会は専門医制度を統括する目的で、カリキュラム委員会、専門医資格認定委員会、専門医試験委員会ならびに施設認定委員会の各委員会と連携を取りながら専門医制度の総合的な運営を行う

ものとして位置づけられております。

日本手外科学会新専門医制度の構築に向けて現在、制度作りを進めており、すでに整備基準案の作成も概ね完了しております。日本専門医機構からは関連する基本領域学会である日本整形外科学会および日本形成外科学会と綿密な連携を図り、サブスペシャルティ学会との間に検討委員会(手外科専門医検討委員会がこれに該当します。)を設置し、専門医研修内容を調整し、新しい専門医制度を設計運営することになっています。しばらくは手外科専門医検討委員会を中心に活動することになります。

◇委員会構成

2019年度の手外科専門医検討委員会の構成としては、専門医制度委員会から加藤博之担当理事(理事長)、朝戸裕貴委員、稲垣克記委員、面川庄平委員、亀井 讓委員、酒井昭典委員、砂川 融委員、平田 仁委員、三上容司委員、矢島弘嗣委員と田中克己が入り日整会から池上博泰委員、原田 繁委員、日形会から島田賢一委員、鈴木茂彦委員が加わっていただき、田中が委員長として取りまとめを行っております。

◇活動内容と今後の方針

日本手外科学会の新専門医制度はすでに更新の時期を過ぎておりますが、日本専門医機構の指示により、新制度の承認までは現状維持の形となっております。従来通り、専門医制度の骨格は変えずに新制度への移行に向けて準備を進めているところです。

2020年2月の段階では、日本専門医機構からの制度設計に関する正式な要請は未だ届いておらず、また、基本領域専攻研修中のサブスペシャルティ領域の並行研修に関しても、その可否は明らかにされておりません。今しばらく、専門医機構の動向をうかがうことになりそうです。この件に関しては、たいへん重要な事項ですので、情報が入り次第、会員の先生方へ急ぎお届けする予定です。

基本領域の専門医制度とともに手外科を取り巻く社会の変化にも対応し、患者・家族の方にとっても、また、手外科医にとっても、さらに良質な医療につながるような制度を目指し、日々努めております。専門医制度の完成にはもう少し時間が必要な状態ですが、進捗状況を含めて可能な限り報告してまいります。今後とも会員の皆様方のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

専門医資格認定委員会

委員長 石河利之

【委員会概要】

専門医資格認定委員会は、亀井 讓担当理事のもと昨年度に続き委員長は石河利之が担当致しました。中尾悦宏先生には引き続きアドバイザーとしてご助力を頂きました。委員は2名交代となり、國吉一樹委員、黒川 正人委員、兒玉 成人委員、高木 岳彦委員、長谷川 健二郎委員(新委員)、松井 雄一郎委員、松村 一委員、松本 泰一委員(新委員)、横田 淳司委員の12名で活動いたしました。専門医制度や受験資格、更新申請の要件等についての様々な問い合わせに対応し、10月以降、専門医試

験受験資格申請、資格更新申請について審査、審議し、また相談医の推薦についても審議致しました。

【活動と審査報告】

専門医試験受験や更新の要件、手続きについて寄せられた質問に対し、随時回答いたしました。8月9日、ホームページに第12回手外科専門医試験申請案内を公開しました。10月25日までの申請期間に専門医試験受験資格認定には69名の、また専門医資格更新には対象者71名全員の申請がありました。疾病療養中の1名が更新をご辞退されました。

事務局で申請書類のPDFを作成し、11月13日に各委員にメールにて送付し審査を開始しました。結果を事務局でまとめ、委員間で共有し、11月25日の第1回web会議で試験受験資格について審議し、60名中問題なく資格認定と判定したのが28名、書類不備や不足、不適切な病歴要約症例の提出や考察不足等を理由に保留32名と判定しました。保留の32名には訂正後の再提出を依頼しました。また12月16日の第2回web会議では更新資格について審議し、資格認定52名、保留18名という結果でした。保留となった申請者には書類の修正を求め、委員で手分けして審査を継続いたしました。これらの手続きを経て、1月11日午後、東京で委員会会議を開催致しました。受験申請では保留となった1名が辞退されましたが、残り68名中67名において、更新申請では70名全員が資格を満たしていると判定いたしました。ただし更新申請の1名において教育研修単位が不足しておりましたが2020年3月の理事会までに規定の単位数を満たす事を条件に仮認定と致しました。また相談医について本年度は対象となる会員はおられませんでした。今年度の審査過程で問題となったのは専門医試験申請書類における要約症例について、診断に要した所見としての画像、特に肉眼写真の添付が乏しいことと最終観察時カルテコピーの形式についてでした。軟部損傷、腫瘍等の肉眼所見が診断・治療において重要な疾患を診療する際にデジタルカメラ等での肉眼所見の記録は必須となっていると考えます。そうであればそのデータを添付することがやはり求められます。しかしながら術中写真の添付はあるのに、受傷時の写真がないものが目に付きました。またカルテコピーにおいては大多数の受験者がそうされているようにスクリーンショットをプリントアウトして提出して頂くのが記入日、ログイン時間等も確認容易であり最も判定しやすい資料でした。電子カルテが当たり前になっている時代ですので、提出書類もそれに沿ったもので作成して頂きたいと思います。

最後になりましたが、ご多忙の中、時間を割いて審査をして頂いた委員の先生方に深謝致します。そして御協力を賜りました多くの学会員の先生方に心より感謝いたします。引き続きお力添えをよろしくお願いいたします。またコングレの事務局の担当の皆様には永きに渡り、学会のためにご尽力頂きました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

施設認定委員会

委員長 副 島 修

今年度は理事・委員の変更はなく、担当理事 信田進吾、委員長 副島 修、委員として長田龍介・岸 陽子・川勝基久・森田哲正・和田卓郎(敬称略)のメンバーで活動しました。主な活動は、認定研修施設に関する規則(専門医制度規則第7章、第20-26条)に基づく手外科専門医施設の新規および

更新認定作業であり、引き続き多くの専門医取得希望者が研修しやすいよう出来るだけ研修施設を認める方向で審査しております。

年度前半に申請のあった17件(新規7件、異動特例9件、更新1件)について、2019年10月に委員でメール審議を行いました。2020年1月中旬からは本格的な認定作業が開始され、73件(新規10件、異動特例3件、更新60件)の審査を委員6名が3班に分かれてメール審議いたしました。ご協力いただいた委員の先生方や事務局の皆様には、深く感謝申し上げます。例年同様に書類不備の申請も多く事務局業務を大きく圧迫しておりますので、今後申請される施設代表の先生におかれましては今一度規則を熟読の上で申請されますようお願い致します。

前述のように出来るだけ研修施設を認める方向で進めてはおりますが、毎年の審査件数も多く認定施設としての適否という観点まで掘り下げた検討が出来ていないのが問題です。手外科学習会/検討会とは何か?カリキュラムに基づく研修が本当に行われているか?手術症例数は現状で問題ないか?などなど、今後理事会や専門医制度委員会での新たな研修施設に関する構想を踏まえながら議論をしていきたいと考えております。

専門医試験委員会

担当理事 砂川 融
委員長 田中 利和

1) 委員会メンバー

専門医試験委員会は砂川融担当理事、佐野和史アドバイザー、池田和夫委員、清川兼輔委員、古川洋志委員、篠原孝明委員、長尾聡哉委員、南野光彦委員、西田淳委員、山崎宏委員、鳥山和宏委員、岩倉菜穂子委員と委員長の田中利和の13名で活動しております。当委員会では年間6回の会議を経て専門医試験問題を作成し、年次専門医試験を実施することを業務としております。

2) 第11回専門医試験を終えて

平成30年度第11回専門医試験は平成31年3月21日(春分の日)に開催しました。受験者数は56名(整形外科52名、形成外科4名)で前年度より10名増加したため、委員会メンバーだけでの対応が不可能となり、2名の委員経験者に応援を頂きました。第9回専門医試験より、新たに筆答問題が一部分野別選択制(共通問題40題と形成・整形外科分野別選択問題各4題)となりましたが、今回も大きな混乱もなく終了しました。分野別選択問題は受験者の基盤学会に関わらず選択可能ですが、整形外科分野選択者は37名(全員整形専門医37名)、形成分野選択者は19名(うち整形専門医15名、形成専門医4名)で、整形外科問題を選択する形成外科医はおらず、形成外科問題を選択する整形外科医が多かったのが特徴的でした。試験結果は、平均点67.9点(最高点89.8点、最低点48.8点)、合格率78.5%と昨年に比べ平均点で約2.5点、合格率12.8%の低下がみられました。

3) 第12回専門医試験にむけて

令和2年度第12回専門医試験は例年同様に令和2年3月20日(金曜日:春分の日)にステーション

コンファレンス東京で開催となります。今回の受験者は67名の予定ですので、当委員会メンバー、日本手外科学会事務局に4名程度の委員経験者の援助が必要と思われます。

2年前より筆答問題は一部分野別選択制となりましたが、当委員会では、各々の基盤学会を軸とした専門性の高い選択問題を作成する一方で、共通問題の中で手外科診療に携わる形成外科医と整形外科医が共有すべき知識をしっかりと確認できる問題作りを行っていく所存です。

カリキュラム委員会

担当理事 島田賢一
委員長 加地良雄

1. 構成員

カリキュラム委員会では平成31年4月に構成員の変更があり、吉本信也委員がご退任され、根本充先生が新たに委員にご就任されました。これにより現在、島田賢一担当理事のもと、石河利広委員、大井宏之委員、坂野裕昭委員、根本充委員、松田健委員、加地良雄委員長の6名の委員で活動を行っています。

2. 活動内容

平成31年4月の学術集会開催時に委員会を開催しました、それ以外ではweb会議で主に教育研修講演申請の審査を行っています。平成31年2月から令和2年1月の間に263件の申請があり259件を認定いたしました。残る4件は講演キャンセル2件、委員会審査前取り下げ1件、認定不可1件でした。

3. 教育研修講演認定申請にあたってのお願い

教育研修講演認定申請書の演題名記載欄には「演題名に肘関節、手外科、手、指、上肢の機能再建および基礎研究、等の手外科領域に関連したものであることが分かるようにタイトルを明記してください。手外科領域との関連を示せないタイトルの場合には手外科との関連を示す100～200字程度の要旨を添付してください。」という注意書きを記載させて頂いています。今年度は会員の皆様のご協力のお蔭で非認定となった申請は非常に少なくなりましたが、やはり要旨の提出が必要となる事例が散見されました。今後は迅速かつスムーズな審査ができますよう、申請にあたっては、手外科との関連を示す文言を演題名に必ず含めていただきますようお願い致します。もし演題名のみでは手外科との関連を示すことが難しい場合には、申請時に要旨の添付をお願い致します。

情報システム委員会

委員長 西浦康正

ワーキンググループでの検討、メール審議を行い、新システム(第1フェーズ)の導入を行いました。また、日整会カードを持っていない日形会会員に対しまして、日手会負担で日手会カードを配布致しました。これにより、日整会システムとの連携を行うことが可能となり、第62回日手会学術集会から

学術集会参加登録、教育研修単位登録が電子化されました。

今後は新システムの第2フェーズとして、専門医関係の電子化およびオンライン決済、オンライン入会などについて検討することとなっています。システム導入には高額な費用がかかります。一度導入すると、その変更にはまた別な負担が発生します。それに加え、事務局移転に伴い、委員会再編の問題があります。このため、この課題に対しましては、年度内に委員会を開催し、次年度の方針を検討する予定となっています。皆様の御理解と御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

用語委員会

委員長 加藤直樹

2019年度の利用語委員会は、信田進吾理事を中心に、用語委員として鳥谷部荘八委員、原友紀委員、松田健委員、松浦佑介委員、湯川昌広委員、そして前年度にアドバイザーとして加わって頂いた後藤渉委員にはもう1年残って頂き、計8名で活動しました。

今年度の作業も前年度に引き続き、整形外科学用語集第8版との整合性についての検討から行いました。本作業は日本整形外科学会から整形外科学用語集第8版に対する意見と、次の第9版に対する要望を問われたことから始まった作業であり、日本整形外科学会用語集に採用して欲しい手外科関連用語を提案する作業や日本整形外科学会用語集に準じて手外科用語集を修正する作業を同時に行っています。各委員で分担して修正候補を予め抽出したものを持ち寄り、委員会では全ての用語についての確認を議論しながら進めていくため、かなりの時間が費やされましたが、今年度中に欧和の部と和欧の部それぞれについての検討が終了する予定です。今後は今回修正候補に挙がった用語について欧和、和欧の両面から見て矛盾がないか再度検討を追加して行い、最終的な整合性をとる作業を進めて参ります。

次に、会員からの手外科用語集に対する修正や要望を受け付ける「用語集に関するQ & A」ですが、今年度は用語についてのご質問を2件頂きました。これについては委員会で検討して日手会事務局を介して返答させて頂きました。一方、修正要望については前年度同様ございませんでした。まだまだ会員における用語委員会の認知度は低いように思えますので、今後も「用語集に関するQ & A」についてのアナウンスを徹底していきたいと考えています。なお、これまで問い合わせを頂いた用語については、ある程度まとまったところで、修正版を日手会HPの会員専用ページにアップする予定です。

最後に、今後行うべき作業として残っているのがGreen's Operative Hand Surgery (第7版) で新たに採用された用語、削除された用語についての検討です。残念ながら今年度も時間の関係で作業に取りかかることは出来ず、前年度同様、対象となる用語の抽出がほぼ完了した段階で中断しております。これについては日整会用語集との整合性に関する作業が全て終わり次第取りかかり、今後は抽出された用語の採否について委員会で検討していくことになります。

以上のように、用語委員会として行うべき作業はまだ多く残っておりますが、しっかりと日手会用語集の完成を目指して今後も努力致しますので、皆様のご理解とご協力のほど、宜しくお願い致します。

特別委員会

定款等検討委員会

担当理事 委員長 柿木良介(兼任)

委員会委員は、麻田義之先生、射場浩介先生、亀井讓先生、楠原廣久先生です。

現在、国際手外科連合日本支部、アジア大洋手外科連合日本支部の機能を国際委員会傘下に設置すべく、細則の充実を進めております。

今後とも日本手外科学会の機能、運営充実のため、委員会委員一同力を合わせて頑張るつもりであります。

どうぞ会員のみなさまからも、奇譚のないご意見をいただきますよう宜しくお願い申し上げます。

医療機器開発・運用管理委員会

委員長 池上博泰

前身の人工手関節運用委員会では新規人工手関節(DARTS人工手関節)実施に関するガイドライン(以下に記載)の策定と運用を行ってきた。これらの経験と実績を生かし、今後、手外科領域全般の医療機器開発と運用管理を行う目的で名称が医療機器開発・管理運用委員会に変更された。

担当理事は大江隆史先生、アドバイザーは岩崎倫政先生、委員長は池上、委員は稲垣克記先生、岩本卓士先生、酒井昭典先生、森谷浩治先生の計7名で構成されている。2017年6月からのDARTS人工手関節使用開始後、販売後成績調査のための実施症例の登録管理、実施者基準のひとつである講習会の主催および受講証の交付を行ってきた。この原稿執筆時点で(2020年1月31日現在)、すでに52例の患者にDARTS人工手関節全置換術が行われて、登録されている。昨年はDARTS人工手関節使用開始後2年が経過し、実施者への講習にe-learningが導入された。またこれに伴い、人工手関節全置換術のガイドラインも一部改定され、その適応が拡大された。下記に改定された現在のガイドラインを記載しておく。

人工手関節全置換術ガイドライン

1. 適応基準

- ①原則として保存的治療に抵抗する関節リウマチまたはその類縁疾患手関節および高度に関節破壊が進行した二次性を含む変形性手関節症
- ②原則として50歳以上
- ③関節リウマチでは、Larsen分類grade IV～Vの患者、IIIにおいては人工手関節以外の手術で著しい可動域の低下や不安定性の出現等が予想される患者。

2. 除外基準

- ①基礎疾患に対するコントロールが著しく不良な患者
- ②神経病性関節症の診断を受けた患者

- ③手関節内部または周囲に感染症がある、若しくは潜在的感染の疑いがある患者
- ④精神・神経疾患を有し、医師の指導を守れないと考えられる患者
- ⑤医師の指導による後療法が実施できないと考えられる患者
- ⑥骨量が極めて少なく強固な固定が見込めない患者や、筋肉、腱の再建が困難で機能の回復が見込めない患者
- ⑦骨セメントの使用に伴う血圧低下、ショック、肺塞栓等の重篤な副作用の既往のある患者
- ⑧活動性の高い症例、重労働に従事している患者
- ⑨歩行時等に手術側で杖などを使用し手関節に過度のストレスがかかる患者

3. 実施者および施設基準

- ①手外科学会専門医
- ②RA手関節を含む手関節疾患に対する標準的な手術経験がある
- ③後に定める手術手技講習会もしくはe-learningを受講したもの
- ④人工関節登録制度の施設IDを取得している施設

キャリアアップ委員会

担当理事 **平瀬 雄一**
委員長 **長田 龍介**

1. 活動報告

(1) 終了した事項

A. 男女共同参画WG

- ・過去の日手会学術集会における託児所利用の状況、経費を調査した。
- ・次期学会での設置を依頼した。
- ・日手会ニュースに「Joyの声」を掲載した。

B. 専門医偏在対策WG

- ・専門医取得に必要な研修が受けにくい環境の医師に対するサポート、地域格差の解消を活動目標にすることを決定した。

C. 両WG共通

- ・各WGが効果的に活動するためにHPを作成することを決定した。
- ・広報委員会との申し合わせにより、日手会HPに当委員会HPのバナーを設置すること、および、当委員会HPの作成、管理、運営は当委員会で行う(※)ことを決定した。

(2) 現時点で進行中の事項

A. 男女共同参画WG

- ・HPのコンテンツ作成
活動状況、女性会員の研修報告、女性会員のTravelling Fellow報告、各学会の女性医師支援の取り組みなどを紹介する。

B. 専門医偏在対策WG

- ・手外科専門研修の受け入れ可能施設リスト作成
研修が受けにくい環境にあり研修を希望する医師の受け入れが可能な認定研修施設を調査する。回答が得られた各施設のリストを日手会ニュース、当委員会HPに掲載する。このリストに指導医、受け入れ可能人数、研修期間、短期間見学の可否、連絡先などの項目を含める。

2. 理事会へのお願い・提言

(1) ご承認いただきたい事項

- ・日本手外科学会学術集会における託児所設置を義務化
- ・当委員会HP作成に必要な経費(※)
- ・平瀬先生、堀井先生の当委員会アドバイザー就任

(2) 今後ご検討いただきたい事項

- ・女性会員、専門医過少地域の会員のtravelling fellowの年齢制限の引き上げ
(女性会員については国際委員会に検討を依頼済み)
- ・女性代議員数の増加
- ・専門医受験資格の要件を満たす研修ができない環境にいる医師に対して、認定研修施設に定期的に通って研鑽を積むことを研修期間として認める案

手外科専門研修施設募集

キャリアアップ委員会では、男女共同参画と手外科専門医偏在対策に取り組んでいます。

家庭の事情や勤務地に専門医が少ないなどの理由で手外科専門研修を受けられない若手医師のために、日本手外科学会HP内で手外科専門研修施設を紹介したいと考えています。

このような若手医師を受け入れ、手外科専門研修を行っていただける施設を募集します。

一般社団法人日本手外科学会 認定研修施設であり、研修医の受け入れが可能な施設は、下記の方法でキャリアアップ委員会まで情報提供をお願いします。

研修施設の情報は、下記の①～⑦の内容を記載した上、以下のアドレスまでメールでお寄せください。情報をお寄せいただいた方にあらためてキャリアアップ委員会の担当者よりご連絡申し上げます。

なお、見学や研修の申し込みは希望者が直接行うことにさせていただきます。

- ①病院名
- ②病院所在地
- ③手外科専門研修の担当責任者(手外科専門医)
- ④見学、研修のどちらが可能か、両方とも受け入れ可能か
- ⑤研修可能な場合の期間(3か月間、1年間など)
- ⑥連絡担当者アドレス

提出期限：今回の締め切りは4月30日とさせていただきます。研修施設はその後も随時募集いたします。

送付先・問い合わせ先：日比野直仁(hibinao@mtd.biglobe.ne.jp)



第4回 日・伊手外科会議に出席して



堀井 恵美子

関西医科大学 整形外科

日伊手外科会議の歴史

イタリアと日本手外科学会の交流である日・伊手外科会議は、2004年11月大阪でAPFSSHが開催された際に、藤先生(弘前大学)が中心となって開かれたのが最初である。第2回は2006年10月にMilanoで、Dr. Pajardiが中心となって行われた。(第27号日手会ニュースに金谷先生報告)2011年第54回日手会総会時に、第3回を弘前にて開催予定だったが、残念なことに東日本大震災により中止になってしまったことは記憶に新しい。

今回、2019年10月10日より、Firenzeで開催された第57回イタリア手外科学会の期間中に、久しぶりに第4回会議が開催された。イタリアの学会長Dr. Pfannerが、初の女性会長になったことから、日本側も女性が団長(?)になることが提案され、ご指名をうけた。とはいうものの、これは全くの形式だけで、理事長の加藤先生(信州大学)が、全部取り仕切ってくださった。

イタリア手外科学会：手外科学会自体は、2日半開催された。Firenzeは街中歴史的建造物がひしめいているが、学会場もその一つで、駅から徒歩数分のPlazzo dei Congressiという、大阪市中央公会堂のような歴史的建物で開催された。学会場は、第1会場以外は、小さな会場が2個であった。私もその一つで発表の機会をいただいたが、小さな会場ゆえに膝をつき合わせた討論ができた。一般口演は、もちろんイタリア語で、スライドから得られた情報だけではあったが、興味深かった。

1日目の夕方7時からopening ceremonyがPalazzo Vecchio(ヴェッキオ宮殿)の五百人広間で開かれた。広い会場にステージがあり、イタリア側の会長・理事長諸先生方とともに、加藤先生と私もステージに座り、挨拶をすることになった。音楽も何もなく、順次10人がスピーチしたが、イタリア手外科の歴史に始まり、Firenzeの歴史、会場の歴史——と、なんとそれが2時間続いた。私は日手会の歴史、加藤先生は日・伊交流の歴史のスピーチを数分ですませて、責務を終了し、その後立食パーティとなった。歴史を重んじる人々であることを痛感した2時間であった。

第2日目の夕方に晩餐会が行われたが、席は決まっていなくて、誰が挨拶をするでもなく、食事が始まった。食事の終了間際に会長・理事長の挨拶と功労者の表彰式があったが、晩餐会はシンプルであった。日本では、晩餐会の乾杯の前には、延々と挨拶が続くのが通例であるが、イタリア式は極めてあっさりで、出席者の楽しい交流の場であった。

日伊合同会議

学会ではjoint meetingのテーマとして、Kienbock病と手指再建が指定されており、前者は松井先

生(北海道大学)と建部先生(名古屋大学)、後者は五谷先生(大阪掖済会病院)と河村先生(奈良医大)が日本側からは発表をした。他にも、神経に関するシンポジウムでは、高松先生(淀川キリスト教病院)が人工神経の話をされ、手指骨折のシンポでは、善家先生(産業医大)、森谷先生(新潟手の外科)などが発表された。各々先生方の豊富な臨床経験に対して、数々の質問がだされて、有意義な討論であった。12題の一般演題を含めe-poster発表もあり、日本人の参加者も多かった。

学会の開催されたFirenzeは美しい街で、食事もとてもおいしかった。ただ、博物館などに入場制限があり、手続きにてまどって少ししか見学のできなかったことが残念であった。イタリア語が分かれば面白いかもと、ポケットークをレンタルしていったが、器機不備のため使用できず、残念であった。是非、いつか、ゆっくりと訪れたい街であった。



学会場にて



Opening ceremony 筆者の左隣がDr. Pfanner

招待国として参加した 第55回フランス手外科学会を振り返って

市原理司

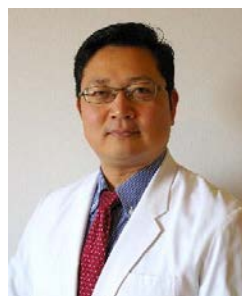
順天堂大学浦安病院手外科センター 副センター長

2019年12月19日から21日までの期日で、フランス・パリで開催された第55回フランス手外科学会に、招待国として日本から4人のスペシャリストを含む総勢6名の先生を御連れし、“Japanese Innovation session”を企画し参加して参りましたので報告いたします。この企画は、2019年よりフランス手外科学会のInternational Associate memberに推薦頂き、学会長のPhilippe Liverneux教授から与えられた最初の大きな仕事でした。

招待講演の先生方は4人で、今谷潤也先生に「解剖学的研究に基づく橈骨遠位端骨折の合併症への対策」、高木岳彦先生には「筋電義手の開発とその臨床応用」、善家雄吉先生には「生体内吸収プレートを用いた手指骨折治療」、五谷寛之先生には「創外固定とマイクロサージャリーを駆使した手の造形手術」をそれぞれ御講演頂き、市原が「シュワン細胞充填した人工神経による生体内再生治療」に関する講演および座長を務めさせて頂きました。当初、座長は学会長がやるとおっしゃっていたのですが、私が急遽座長を拝命するという驚き的一幕がありました。拙い座長にもかかわらず、すべての招待講演の先生方が最高の御講演をしていただき、2000人以上収容するメイン会場では、写真や動画を多くの

フランスの先生方が撮影しており（フランスでは許可されています）、大きな関心を持って聞かれていました。各演者の先生方が講演内容に素晴らしい工夫をされていて、会場が笑いに包まれたり、どよめいたりフランス手外科の歴史に大きな足跡を残したセッションであったと確信しています。セッション終了後には、学会長や多くのフランス手外科の重鎮からも最高の賛辞を頂きました。

学会2日目の夜に開催された会長招宴では



セッション後に学会長のPhilippe Liverneux教授と

パリ市内を一望できるハイアット・リージェンシーホテルのスカイバーで最高のシャンパンと牡蠣を堪能しました。日本と共に招待国であった中国の先生方とも交流を深めることが出来ました。

そして中国の先生がアカペラで素晴らしい歌を披露されているのを見て、我々も日本の歌で学会長に感謝の意を示そうという今谷先生の発案により、日本からの参加者全員で“SUKIYAKI SONG”をステージで大熱唱し、これまた拍手喝采を頂き大成功に終わりました。

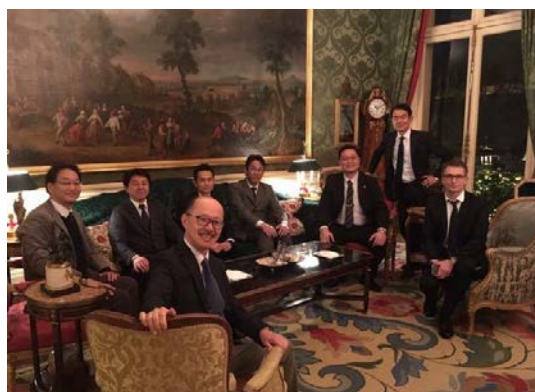
学会の本会以外にも日本の先生方にフランスの文化を知ってもらおうと様々な企画を準備しました。学会前日にはCadaver Workshopを企画し、日本の先生方に参加頂きました。学会初日の夜には“Japanese dinner”を開催し、フランス手外科の巨匠であるChristopher Mathoulin先生から御推薦頂いた宮殿の様なレストラン“Restaurant Le Clarence”で日本の先生方と楽しくも思い出深いひとときを過ごさせて頂きました。

学会最終日の夜はチームジャパンいきつけのムール貝の名店“LEON”で祝杯を挙げ、楽しかった“フランス手外科学会招待国チームジャパンの旅”は幕を閉じました。

今後も日本手外科学会の国際化がますます進むように、ヨーロッパとの架け橋の一翼を担えるように努力を続けていきます。最後になりますが、Japanese Innovation sessionで御講演いただいた先生方、そしてこの学会が円滑に進むようにサポートしてくれた妻に感謝致します。



今谷潤也先生、五谷寛之先生と
SUKIYAKI SONGを熱唱している様子



Restaurant Le Clarenceにて日本の先生方と



Cadaver Workshopで田中祥貴先生にMIPOの
操作法を説明している様子



学会最終日に“Leon”で開催されたチームジャパン
最後の晚餐の様子

JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

岩本卓士

慶應義塾大学 整形外科

2019年度のJSSH-ASSH Traveling Fellowとして2019年8月26日から9月14日の日程で東京大学の上原浩介先生と共に米国を訪問させていただきました。ASSHが決定した8コースから選択する形式となっておりましたので、選択したコースの4施設を訪問しました。同じコースを選択したニュージーランドからのフェロー（Dr. Sandeep Patel）と共に有意義な3週間を経験することが出来ましたので、ここに報告させていただきます。

Washington University (St. Louis, MO)

アメリカとしては珍しく空港から電車でアクセスが非常に良い病院で、まず広大な敷地に圧倒されました。女性医師 Dr. MooreとDr. Mackinnonの脊髄炎による神経麻痺に対する神経移行、断端神経腫に対するAllograftを用いた手術など、大変興味深い手術を見学させていただきました。各国から多くのフェローが勉強に来ており、神経移行や神経麻痺に対する診断まで、有意義なディスカッションを経験することが出来ました。



Dr. Amy Mooreと

Emory University (Atlanta, GA)

Dr. Wagnerを中心に若いチームでしたが、肩関節から切断指まで上肢疾患をすべて扱うという

アクティブなチームで、同世代の医師に大変刺激を受けました。地域医師の集まるケースカンファレンスで30分間のプレゼンテーションの機会を頂き、日米の臨床上の違い(抜釘について、オピオイドについて)を議論することが出来ました。また非常にホスピタリティ溢れるチームで多くの観光名所を案内して頂きました。



Emoryの上肢班チームと

Stanford University Medical Center (Stanford, CA)

Annual Meetingを挟んでStanfordを訪れました。留学中の山形大学 丸山真博先生ご家族に新しく開院した病院をご案内頂きました。Dr. Yao, Dr. James Changの前で研究内容のプレゼンテーションを行う機会を頂き大変緊張しました。手術はスタンダードな手外科手術を多数行っており、フェローに非常に手厚く指導している姿が印象的でした。



カンファレンスでのディスカッション



Stanfordのチームと

University of Michigan (Ann Arbor, MI)

最後の訪問地は日本でもご高名なDr. Kevin Changのところでした。大変教育熱心な先生で、私たちtravelling fellowにも諮問のような厳しい質問が投げかけられ、緊張感を持って議論しました。こちらでも研究内容をプレゼンする機会を頂き、Dr. Kevin Changが造詣の深いシリコンインプラントに関して議論出来たことは得がたい経験となりました。



Dr. Kevin Changと

最後になりますが、この貴重な機会を与えてくださいました加藤博之理事長、柿木良介担当理事、服部泰典委員長をはじめとする国際委員会の先生方、推薦して下さった慶應義塾大学松本守雄教授、佐藤和毅教授、留守中に病院業務をフォローして下さった慶應義塾大学上肢班の皆様、そして3週間苦楽をともにして支えてくれた上原浩介先生、Dr. Patelに心より感謝申し上げます。



3週間過ごした先生方。左：上原先生 中央：Dr. Sandeep Patel 右：筆者

JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

上原 浩介

東京大学医学部 整形外科

2019年度のJSSH-ASSH Traveling Fellowとして、アメリカ国内4施設を訪問し、ASSHにも参加させていただきました。

コースはあらかじめ用意された8つのprogramから、1つ選択する方式で決まりました。慶応大学の岩本卓二先生、ニュージーランドからのDr. Sandeep Patelと3週間を共にしました。

Plastic and reconstructive Surgery at Washington University, St. Louis

神経の基礎研究・臨床において新進気鋭のDr. Amy Mooreにホストをしていただきました。初日はcadaver labから始まり、Dr. Mooreの両側同時腕神経叢手術(神経移行)、Dr. Susan E. MackinnonとDr. Mooreの外来見学をさせていただきました。2日目は橈骨神経麻痺、allograftを用いた断端神経腫の手術、小児の両側神経移行を見学した後、Dr. Mooreに神経の講義をしていただ



Dr. Amy Mooreと



手術室にて



Dr. Susan Mackinnonの外来にて

きました。移行神経への電気刺激やallograftなど、基礎研究で得た知見を臨床に活かしているのが印象的でした。

Emory University

ホストのDr. Eric Wagnerは2014年に私のMayo Clinic留学中に、肩肘のフェローとして在籍しており、元々面識がありました。Dr. Charles Daly、Dr. Michael Gottschalkを加えた3人の手外科スタッフは若くエネルギーで、お互いの臨床や研究について何時間も意見交換しました。

初日は市内観光の後症例検討会(形成外科・整形外科合同)、2日目は整形外科医に我々の研究を各々30分ずつ発表させていただきました。私はクラスター解析を用いた母指CM関節症の新分類の提案、DPCを用いた日本における母指CM関節症の手術内容のうちわけとここ数年のトレンドに関する研究、大規模コホートROAD studyの縦断データから得られた母指IP関節症・MP関節症・CM関節症・STT関節症の発生率に関する研究を発表させていただきました。その後、Dr. Daly, Dr. Gottschalkの手術を見学させていただきました。

帰国後もDr. Wagnerの学生の研究のサポートをするなど、collaborationは続いています。



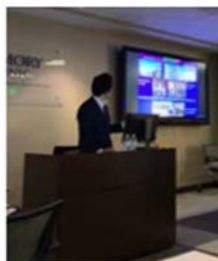
Dr. Daly, Dr. Wagnerと



Emory大の上肢ファカルティと



Dr. Gottschalkと



ASSH (Las Vegas)

International fellow presentation sessionで発表の機会を与えていただき、CM関節症に関連した内容を発表させていただきました。



ASSH International Traveling Fellow、ファカルティの先生方と

Stanford University Medical Center, Stanford

研修前に、山形大整形外科の丸山真博先生にStanford大のメインキャンパスや周辺の建物を案内いただきました。貴重な休みを我々のために使っていただき、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

初日は抄読会の後、我々の研究を発表させていただきました。ここで我々は二手に別れ、私はDr. James Changの手術(粘液嚢腫、母指CM関節症、ドケルバン病、強皮症の異所性石灰化)を見せさせていただき、強皮症の手術に関する論文や彼が編集した教科書をいただきました。大菱形骨の切除



Stanford大の先生方と



Dr. Robin Kamalと



Dr. Jeffrey Yaoと



Dr. James Changと

法が参考になり、帰国後、大菱形骨切除は教わったやり方でやっています。その後、Dr. Catherine Curtinの鷲手の手術を見せていただきました。2日目はDr. Jeffrey Yao、Dr. Robin Kamalの手術を見学させていただきました。

University of Michigan

初日は朝からDr. Kevin Chungの手術見学でした。Intermuscular nerve transferは印象的でした。手術見学の後、我々の研究を発表させていただきました。熱心に聞いていただき、建設的な意見をいただきました。

2日目は手術見学の合間に、philosophyを記したというエッセイを読ませていただきました。論文を量産する秘密を垣間見ることができました。



Dr. Kevin C. Chung先生の研究室メンバー



Dr. Kevin C. Chungと



最後になりますが、貴重な機会を与えてくださいました日本手外科学会加藤博之理事長、柿木良介担当理事、服部泰典委員長をはじめとする国際委員の先生方、推薦いただきました東京大学整形外科田中栄教授、JR東日本総合病院三浦俊樹先生、いつもご指導いただいております大江隆史先生、留守中に外来・病棟業務をフォローしてくださった森崎裕先生をはじめとする手の外科診の先生方、3週間の長旅をご一緒いただいた慶応大学岩本卓二先生、Dr. Sandeep Patelに心より感謝申し上げます。



KSSH-JSSH Travelling Fellow報告記



兒 玉 祥

広島大学整形外科

この度2019年JSSH-KSSH Travelling Fellowに選出いただき、韓国手外科学会学術集会参加と韓国国内の施設を訪問しましたのでご報告いたします。

2019年10月27日から11月8日までの2週間の滞在で、学会の前に大邱にあるW hospitalへ4日間、週末学会へ参加し、翌週にソウルのSt. Mary's hospitalへ2日間、Seoul National University Hospitalへ2日間訪問致しました。

W HospitalはSang-Hyun Woo先生が個人で開設された病院で、手外科医が10名、整形外科医が4名、病床数約300と手外科ではこの地域の中核を担う病院でした。予定手術は一日約20件でしたが、大邱市は工業都市であることから労働災害が多いようで手の急患手術がさらに1日20件、切断指再接着も毎日のようにあり非常に手術症例の多い病院でした。遊離足趾関節移植をはじめとして多くの再建の手術を見学させていただきました。またWoo先生は先天異常の治療にも力をいれておられ、滞在期間中のみでも多指症6例、合指3例、斜指症1例と多くの手術をこなされていました。それぞれの手術にご自身の経験を踏まえた工夫がなされており、多くの知見を得ることが出来ました。また滞在期間中2回プレゼンテーションをする機会を頂きました。前年のKSSH-JSSHトラベリングフェローの宇佐美先生から15分のプレゼンテーションを3つ準備しておくこと勧められそのように準備して大変助かりました。

学会での講演の前にStanford大学のJames Chang教授がW hospitalへ講演に来られました。なぜかTravelling Fellowの私が釜山から大邱までWoo先生のドライバーとともに片道1時間半かけて迎えに行くという特別な経験をしました。これは私にとってChang先生と話をする貴重な機会になるであろうというWoo先生なりの粋な計らいであったと思われれます。元々10月28日から30日の3日の滞りの予定でしたが、盛沢山のスケジュールが組まれており結局31日まで4日間滞在することになりました。

学会は11月1日2日の二日間行われました。今年の本学会はASSH/KSSH joint meetingと題して、ASSHから13人の講師が招待されていました。Asian travelling fellowは私の他に台湾から2名、香港、シンガポール、マレーシアから各1名の計6名が招待されており、Annual international meetingと題されているとおり国際色豊かな学会でした。

韓国の先生もスライドはすべて英語で作成され、さらに英語が得意な先生は英語でプレゼンテーションをされていました。多くの先生が非常に流暢な英語が使われており、日本との大きな

違いを感じました。参加者は300人程度、2会場、演題数はPaper60題と小規模ではありましたが、どの発表にも3-4名の質問があり、熱のこもった討論がされていました。私はTravelling fellow presentationというセッションにて現在大学で研究しているカーボンナノチューブを用いた末梢神経再生に関する15分の発表をさせていただきました。学会の概要としては骨折や外傷の発表が多い印象ではありましたが。またWALANTが新しい試みとして一つのセッションが組まれており、普及するのがこれからであるという印象を受けました。韓国ではAllograft製品が盛んに使われており、学会の2週間後から脱細胞化同種神経AVANCE®が発売となるなど日本の先を行く部分もありました。

学会の最終日にはPost-congress lectureとしてLalonde先生によるWALANTに関連した4時間の講演もあり参加させて頂きました。WALANTの手法のみでなく、先生の腱損傷に対する手術、後療法のコツも含めた大変教育的な内容となっていました。学会の翌朝、偶然にもLalonde先生と二人で朝食をとることになりました。日本では同様のレクチャーをされておらず、是非日手会でもpre-courseのような形で4時間のレクチャーをしたいとおっしゃっていました。

学会期間中はPre-congress dinner, Presidential dinnerと最終日の3日間ともDinnerに招待して下さり、韓国の先生方やASSHの先生方と交友を深めることが出来ました。

学会明けて翌週、11月4-5日Seoul St. Mary's Hospitalを訪問しました。Seoul St. Mary's Hospitalはソウル大学病院、サムソン、アサンメディカルセンターと並ぶ韓国の5大病院の一つです。手外科を主催されているのはYang-Guk Chung教授でした。Chung教授は末梢神経の脱細胞化処理に関する研究を行われており、1億円以上の研究費を獲得され韓国独自の脱細胞化同種神経の開発を目指されているそうです。手術と外来を訪問し、Kienböck病に対するBishop法やCMC implant arthroplastyなど6件の手術を見学しました。

11月6~7日の2日間 Seoul National University HospitalのGoo-Hyun Baek教授を訪問しました。Baek教授は手外科分野では大変ご高名な先生でJournal of Hand Surgery Asian-Pacific volumeのeditor in chiefでもありますが、特に先天異常の手術を得意とされています。Baek教授の母指多指症の手術は2件見学しました。多指症は残念ながらBaek先生が発表されているModified Bilhaut-Cloquet法の症例ではありませんでしたが、手術のコツを細かく講義して頂く事が出来ました。また翌日にはJi-Hyeung Kim先生の母指形成不全に対するPollicizationを見学しました。Kimは偶然にも前月に行なわれたASSHで同じセッションで発表している事が分かり話も盛り上がりました。

この度のFellowshipに際し、長年の友人であるSt. Mary's HospitalのIl-Junk Park教授にサポートして頂き非常にスムーズに旅程を組むことができました。また今回のFellowshipを通して沢山の友人を作れたことは私にとって大きな財産となったと思います。2019年の10月は日韓関係がどん底のような時期で、街中を歩いても日本人は全くいないという状態でした。しかし学会期間中や訪問先では整形外科の先生はもちろんの事、スタッフの皆さんにも歓迎いただきました。これも日本手外科学会の諸先輩のご功績と韓国の先生方と友好関係を築いてこられたおかげであると実感致しました。日韓関係は政治経済では冷え切っていますが、個々の友好関係は暖かいままであり、我々はこの友好を継続させる責務があると痛感されました。

最後になりますが、今回のTraveling fellowshipに際して推薦を頂きました広島大学整形外科安達伸生教授、広島大学上肢機能解析制御科学砂川融教授、ご指導頂きました広島県立リハビリテーションセンターの水関隆也先生を始め、サポート頂きました広島大学同門の先生深謝いたします。また選考頂きました日本手外科学会加藤博之理事長、国際委員会柿木良介担当事務、服部泰典委員長および国際委員の先生方にお礼申し上げます。

また将来、機会を作って韓国手外科学会に参加しようと思います。



W Hospital : 関節移植術の手術風景



W Hospitalの先生方と(左前2番目)Woo先生



学会会場にて



Congress dinnerにて中央が会長のJin-Soo Kim教授(左)、他国のトラベリングフェローとの2次会(右)



Seoul St. Mary's Hospitalの先生方(左前) Chung教授



Seoul national university hospital (中央) Baek教授

日本手外科学会関連のお知らせ

◆第63回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2020年4月23日(木)～24日(金)
会 場：朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター
会 長：坪川 直人(一般財団法人新潟手の外科研究所)
詳 細：<https://admedic.co.jp/jssh2020/>

.....

◆第26回春期教育研修会◆

会 期：2020年4月25日(土)
会 場：朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

.....

◆第26回秋期研修会◆

会 期：2020年8月22日(土)～23日(日)
会 場：京都府民総合交流プラザ京都テルサ テルサホール
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

.....

◆第64回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2021年4月22日(木)～23日(金)
会 場：長崎ブリックホール、長崎新聞文化ホール
会 長：田中 克己(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 形成再建外科学)

関連学会・研修会のお知らせ

◆第63回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：2020年4月8日(水)～10日(金)
会 場：名古屋国際会議場
会 長：亀井 譲(名古屋大学形成外科 教授)
詳 細：<http://jsprs2020.jp/>

.....

◆第32回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：2020年4月24日(金)～25日(土)
会 場：朱鷺メッセ(新潟市中央区)
会 長：西村 誠次(金沢大学医薬保健研究域保健系 リハビリテーション科学領域)
詳 細：<http://meeting32.jhts-web.org/index.html>

.....

◆第93回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2020年5月21日(木)～24日(日)
会 場：福岡国際会議場・福岡サンパレス・マリンメッセ福岡・福岡国際センター
会 長：丸毛 啓史(東京慈恵医科大学 整形外科学講座)
詳 細：<http://www.joa2020.jp/index.html>

.....

◆第13回日本手関節外科ワークショップ◆

会 期：2020年9月5日(土)
会 場：つくば国際会議場
会 長：田中 利和(キッコーマン総合病院)
詳 細：<https://www.jsw2020.com/>

.....

◆第31回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2020年9月11日(金)～12日(土)
会 場：ホテルスプリングス幕張
会 長：桑原 聡(千葉大学大学院医学研究院脳神経内科学 教授)
詳 細：<http://jpns31.umin.jp/>

◆第33回日本臨床整形外科学会学術集会 どまんなか学会 愛知◆

会 期：2020年9月20日(日)～21日(月・祝)
会 場：名古屋コンベンションホール
会 長：前田 登(愛知県整形外科医会 会長/前田整形外科クリニック)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/33jcoa/>

.....

◆第29回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2020年10月8日(木)～9日(金)
会 場：パシフィコ横浜 ノース
会 長：前川 二郎(横浜市立大学形成外科学)
詳 細：http://www.jsprs.or.jp/member/information_society/2020/detail.html?num=2

.....

◆第35回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2020年10月15日(木)～16日(金)
会 場：京王プラザホテル
会 長：山本 謙吾(東京医科大学整形外科学分野 主任教授)
詳 細：<https://site2.convention.co.jp/joakiso2020/information.html>

.....

◆第47回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

(第5回アジア太平洋マイクロサージャリー学会(APFSRM)との合同学術集会)

会 期：2020年11月20日(木)～21日(金)
会 場：北九州国際会議場
会 長：服部 泰典(小郡第一総合病院 整形外科)
詳 細：<http://jsrm.umin.jp/meeting/index.html>

.....

◆第31回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：2020年12月3日(木)～5日(土)
会 場：愛知県産業労働センター(ウィンクあいち)
会 長：服部 義(あいち小児保健医療総合センター・センター長)
詳 細：<https://site2.convention.co.jp/jpoa31/>

編 集 後 記

日手会ニュース53号をお届けします。新型コロナウイルス感染症の拡大が懸念され、小中高校の臨時休校、大規模な集会やイベントの中止など私たちの生活に大きな影響を及ぼしています。さて第63回日本手外科学会学術集会が新潟手外科研究所所長の坪川直人会長のもと、令和2年4月23日(木曜日)・24日(金曜日)に朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターで開催予定です。ただ昨今の予断を許さない状況を鑑みますと、プログラムに大幅な変更の可能性も危惧されます。2011年3月11日の東日本大震災では4月開催を控えていた弘前での日本手外科学会がweb会議となっておりますが、今回は早く新型コロナウイルス感染症が収束し無事開催されることを望むばかりです。

今回上羽先生の手外科温故知新は手外科医とハンドセラピストとの連携をもっと学会という組織単位で行う必要があるとお示しいただきました。第6回の手外科医パトシリレーでは生田先生がアメリカで影響を受けられた6人の先達への思いが述べられています。原友紀先生のJOYの声もこれから手外科専門医を目指す先生方の励みになることと思います。

また2019年11月15日に阿部宗昭先生がご逝去され白井久也先生に追悼文をご寄稿いただいております。私事ですが20年ほど前、阿部先生が教授を務められていた大阪医科大学に国内留学させていただきご指導賜りました。その後も学会やプライベートでも懇意にいただき、お会いするたびに優しくお声掛けいただきました。お体の具合がすぐれないことは白井先生や他の大阪医大同門の先生方から伺っていましたが、お亡くなりになった日に連絡をいただいた際にはあまりにも急な知らせで愕然としました。そしてその追悼文を掲載する53号の編集を担当するとは思ってもありませんでした。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

そして「手(ハンド)の日」の8月10日にむけてその目的である一般人への手の重要性の再確認、日本医療界への手外科アピール、手の障害予防を推進(温故知新VI)のために広報渉外委員会としてもいろいろな案を検討し盛り上げていきたいと思っております。(文責:熊本機能病院 寺本 憲市郎)

広報渉外委員会

(担当理事:平瀬雄一, 委員長:佐竹寛史)

委員:大江隆史, 大谷和裕, 岸 陽子, 辻 英樹, 寺本憲市郎)